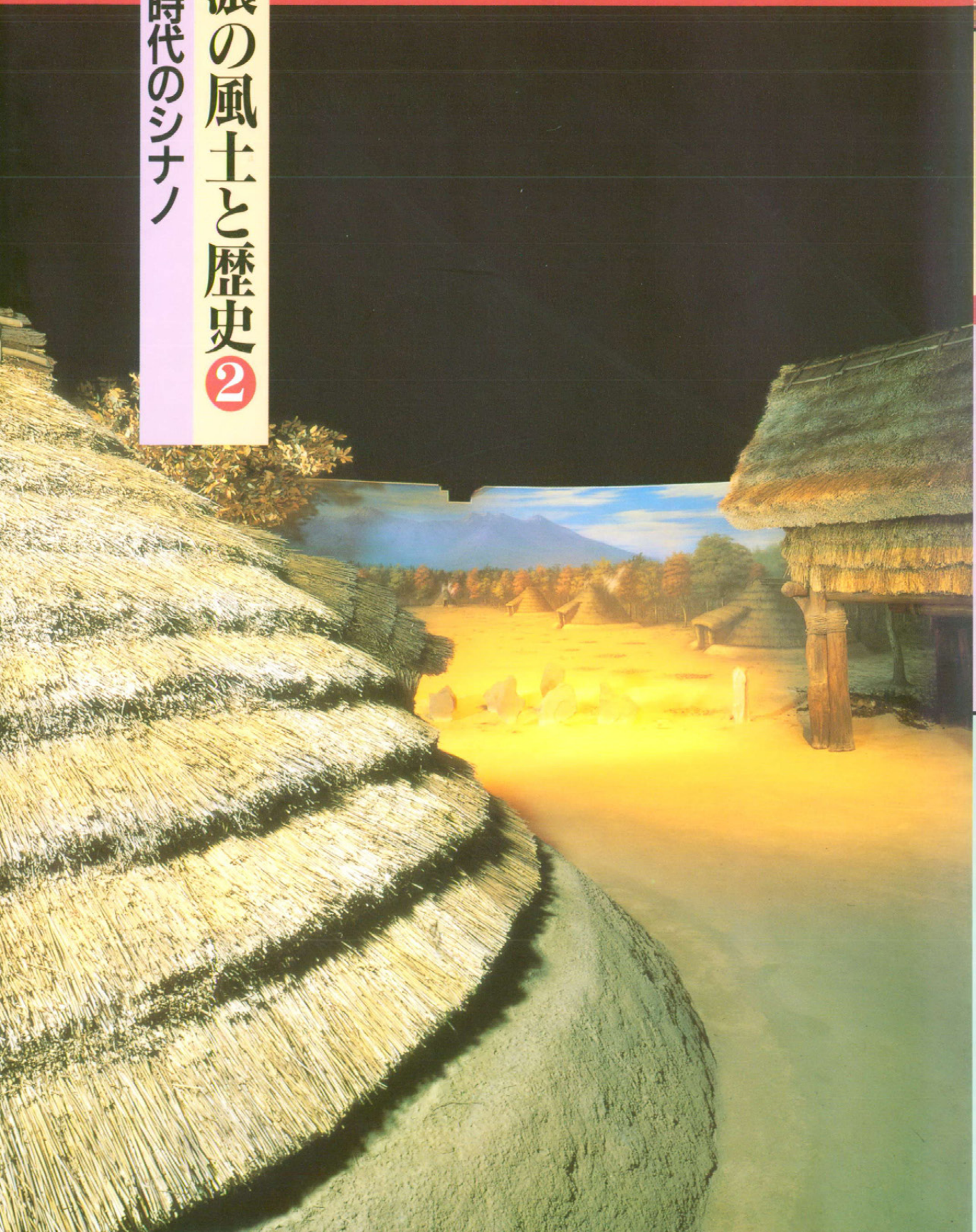
長野県立歴史館

Nagano Prefectural
Museum of History

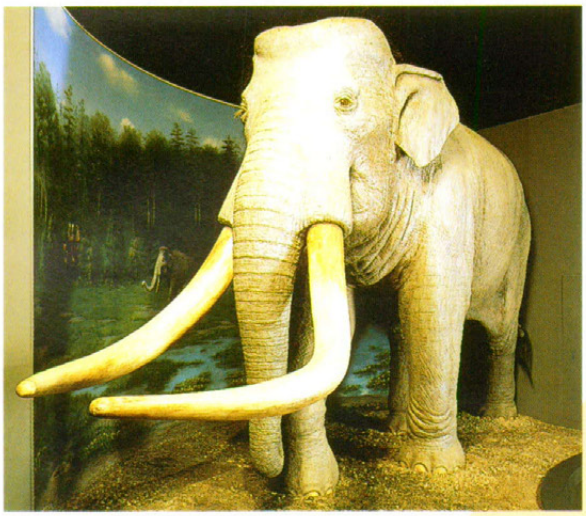
信濃の風土と歴史 ②

原始時代のシナノ



信濃の風土と歴史②

原始時代のシナノ



長野県立歴史館

はじめに

縄文時代は信州の歴史のなかで、一万年の長きにおよんでいます。そのなかでも縄文中期は豊かな文化が発展した時代でした。この時期は温暖な気候で、現代より二度ほど気温が高く、大量の大陸氷河が融けたために「縄文海進」といって、海水面が六メートルも上昇しました。信州では標高一六〇〇メートルまで山地帯となり、ヤマグリ、オニグルミ、ミズナラ、トチなどの落葉広葉樹林が繁茂して、豊富な木の実を供給し、またこのような食物連鎖で野生動物を大量に増殖させました。この結果、信州には茅野市の尖石をはじめ、縄文の大遺跡が残されていますが、縄文土器に示されている活動的なデザインに、現代人は魅せられています。

縄文後期から弥生時代は小氷期で、対馬海流の勢力は衰退して、日本海側の積雪量が減り、イノシシやシカが現代の深雪地帯まで生息するようになりました。またサケやマスが大量に川をさかのぼり、古信州人の生活も大きく変わりました。

水田で灌漑して米をつくる稲作は、麦類や雑穀に比較して生産力が高いのです。稲作がいち早く発展した長野、松本、伊那などの諸盆地では、豪族たちが小国家をつくり、古墳文化を形成しました。やがてかれらは大和王朝の傘下に入り、さらに律令国家の政治体制に組みこまれて、信濃の国が生まれました。

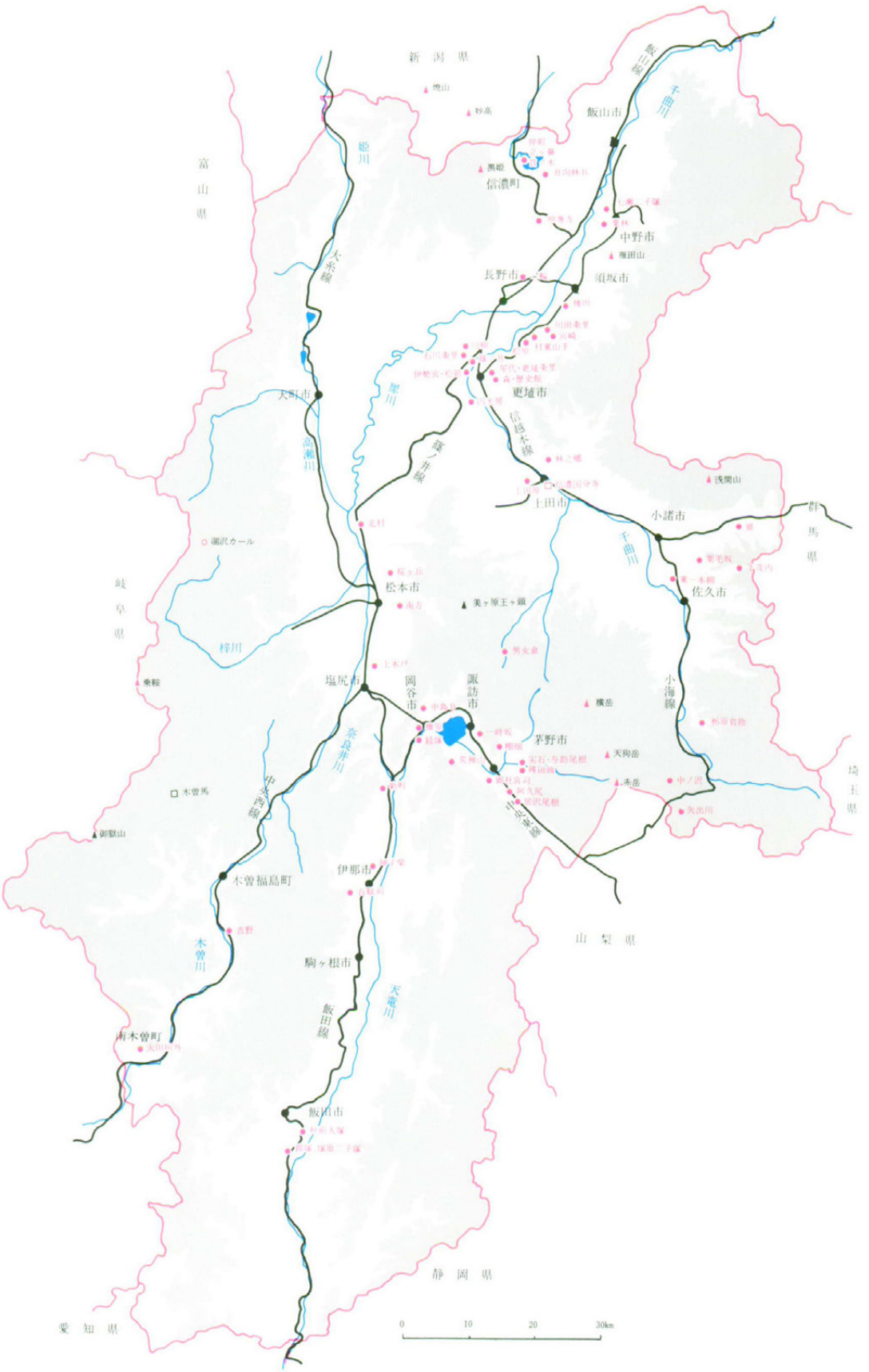
原始時代は人びとと自然とのかかわりが深く、風土に根ざしたロマンに富む歴史が展開されてきました。

この『信濃の風土と歴史②—原始時代のシナノ』は、当時の歴史をやさしく解説していますので、ぜひ読んで歴史のもつおもしろさを知っていただきたいと思います。

一九九六年三月

館長　市川　健夫

この本に登場する長野県内の遺跡



目次

はじめに
この本に登場する長野県内の遺跡
目　次

文字がないのにどうして歴史がわかるのでしょう……6

歴史をたどる
歴史を調べる
「かたち」から歴史を読む考古学
先土器時代
縄文時代
弥生時代
古墳時代
歴史の意味

テーマ1　環　境……11

♧環境の変化に適応した人びと　12
大むかしの気候変化はどうやって調べるの　14
氷河時代に人びとはどうやって暮らしていたの　18
縄文時代の気候は暖かかったの　22
シナノで稲作が始まったのはいつごろなの　26
☆野辺山高原の先人に学ぶ　30

テーマ2　災　害……31

♧災害をしのいだ人びと　32

大昔は長野県の火山も爆発していたの　50
地震の跡は遺跡でもみつかるの　46
火事にあった家の跡もみつかっているの　42
洪水に埋まった遺跡はあるの　38
☆浅間山の噴火と県遺跡　34

テーマ3　戦　争……51

♧はじめて戦争をした人びと　52
弓矢や槍は戦いの道具じゃないの　54
戦争はいつごろ始まったの　58
森将軍塚古墳にほうむられた人は将軍だったの　62
よろいを着た古墳時代の人たちはいつも戦っていたの　66
☆濠に囲まれた篠ノ井の弥生ムラ　70

テーマ4　工　夫……71

♧日常生活に工夫をこらした人びと　72
草木はさまざまな道具に利用されたの　74
暮らしに役立った動物もいたの　78
壊れてしまった道具はすぐに捨ててしまったの　82
ゴミはどうやって処理していたの　86
☆石に働きかけた遺跡　90

協力者のみなさん　91
あとがき　92
歴史館利用案内　92

文字がないのにどうして歴史がわかるのでしょう

歴史をたどる

長野県には野尻湖のナウマンゾウの時代以来、およそ四万年の歴史があります。私たちの祖先は、いつの時代も多かれ少なかれ、豊かな自然とかかわりながら歴史を築いてきました。

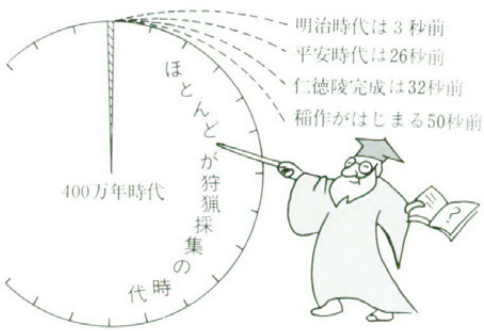
この気の遠くなるような長い歴史の流れをわかりやすく理解するために、それを一日という時間（二四時間）に置きかえてみましょう。

人類が地球上にあらわれたのは四〇〇万年前ですから、現代の今の瞬間を起点に二四時間に換算してみると、明治維新はわずか三秒前、豊臣秀吉が大坂城を築いた四〇〇年前は約九秒前、平城京（奈良）から平安京（京都）に都が移った七九四年は約二六秒前に相当します。また、日本最大の前方後円墳である大山古墳（仁徳天皇陵）がつくられたのは三二秒あまり前、そして、稲作農業がはじまった弥生文化の開始が約五〇秒前ということになります。

こうしてみると、人類が誕生してから日本で食料を本格的に栽培する農業がはじまるまでには、人びとは、じつに二三時間五九分あまりもの長いあいだ、狩猟や採集生活を続けながら、それを基盤にして歴史を築きあげてきたことがわかります。

また、人びとがみずから食料を栽培して「待つ」ことができるようになってから、人類の歴史は急速に文明化してきたことをこの数字が示しています。

私たちの祖先がやってきたこと、残してきたものにはかならず意味があります。それは時代や社会のあり方によって少しずつ変化していますが、それをたくさん集めて変化のあとをたどっていくと、当時の生活のようすや祖先が伝えようとしたものなどが明らかになってきます。



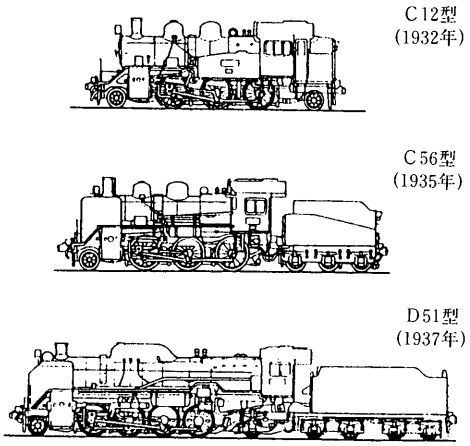
過去をさかのぼる時計
人類の歴史をこうした時計に置き換えてみると、農耕以前の狩猟採集の時がどれほど長かったかがよくわかる。

歴史を調べる

学校の歴史の授業などで歴史に興味をもち、私たちが歴史を調べようとするときにはどうするでしょう。まず、図書館にいって本を調べます。百科事典などの索引で必要な情報を探し、そこにあった参考文献をたよりに検索カードで歴史の専門書を探すことができます。

自分たちの身近な地域の歴史については、おじいちゃんやおばあちゃん、近所の物知りのお年寄りから昔の話を聞くこともできます。

こうして自分たちが住む郷土の歴史を明らかにしていこうとするとき、明治時代ぐらいまではお年寄りから体験を通した話を聞くことができます。これを「聞き取り調査」とよんでいます。人からものをさぐり、名もない庶民の日常生活を明らかにする民俗学の調査は、この方法によっておこなわれます。民俗学は現在の生活のなかになんらかのかたちで残り、長い過去にわたって繰りかえしおこなわれていることを対象に、私たちの祖先の生活様式や文化内容を明らかにしていきます。また、この時代は当然、文字で記された記録もたくさん残っています。



SLの型式変化
蒸気機関車は、型式の呼び名とともに変化できた。

古い話を聞ける人のいない明治時代以前の歴史については、文字に書かれた古文書（文献史料）で調べます。ふつうの村では江戸時代のはじめごろまでの歴史をたどることができます。もっとも古いのは、奈良市にある正倉院史料で、奈良時代の長野県に関するものも残されています。また、最近ふえてきたものに、平城京跡や更埴市の屋代遺跡群などの遺跡から出土した、木の札に文字を書いた木簡があり、文書には記録されていない歴史が書き残されています。

それとともに、道のかたわらに立っている石仏や石造物、お寺の鐘などにも、つくられた年代や寄進者などが記されています。このような資料を「金石文」とよんでいます。金石文も文字史料の少ない村の歴史を明らかにしていくうえで、たいへん貴重な史料となります。

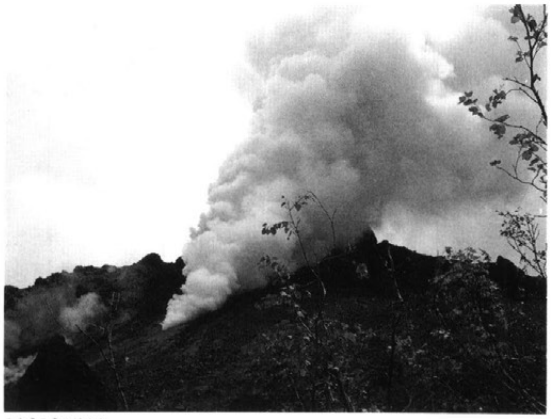
「かたち」から歴史を読む考古学

文字のない古墳時代以前は、土器や石器、鉄器などのかたちや残り方の特色から歴史を読んでいきます。つまり竪穴住居などの遺構や土器などの遺物から人間の営みを導きだすのが考古学です。

考古学では、一定の時期や地域的な広がりを示す土器や石器に箱清水式土器とか、神子柴型石斧といった型式名をつけます。型式名は、化石でいえば年代を示す基準となる化石名にあたるもので、これによってほかと区別する方法をとり、時間の尺度としても使います。それはD51などというSL（蒸気機関車）の型式や自動車の型式（年式）に似ています。つまり、それらの型式からつくられた年代がわかり、そしてそれらが用いられた背後にある当

時の社会や文化も読みとっていけるわけです。

こうした土器型式を時間軸にして、土器の使われた時期の住居跡、その家で使われた食器などの土器、調理具や解体具などに使われた石器、または身を飾った石や骨角器などの装飾品の出土状態をていねいに記録をとりながら発掘していき、道具の組み合わせや配置などからその家に暮らした人びとのようすを復原していきます。考古学の発掘は、たとえはあまりよくありませんが、警察の鑑識課の仕事に似ています。鑑識課は犯人のいない事件現場から犯行時間や人物像を割りだし、特定の犯人を突きとめていくわけです。



妙高焼山の噴火　新潟県妙高高原町（宮川速雄氏提供）
先土器時代にはこのような噴火が各地で起こり、その火山灰が堆積して赤土のローム層を形成した。

こうして、遺構や遺物から歴史を読む考古学によって明らかにされた原始時代の歩みを、最初に簡単にみておきましょう。

先土器時代

縄文土器が出現する以前の、日本列島の歴史上もっとも古い時代を先土器時代とよんでいます。旧石器時代ともいいます。この時代は大陸と陸続きであったために、アジア象の仲間であるナウマンゾウも渡ってきました。今から四万年前に野尻湖の立が鼻遺跡（上水内郡信濃町）に暮らした野尻湖人たちは、このナウマンゾウを、湖や周辺の湿地に追いこんで狩りをしました。

この時代は、妙高山・黒姫山・飯綱山などの火山活動が活発でした。また気候は現在の北海道並みの寒さでした。そのなかで、和田峠や霧ケ峰付近からとれる黒曜石でつくったナイフ形の石器や槍の先など、石の道具を使って狩猟生活をおこない、ハシバミなどの植物も採集していました。

黒曜石は割れ口がガラスのように鋭くなるため盛んに利用され、和田峠付近から中部・関東地方をはじめ、近畿地方にも運ばれていきました。先土器時代も終わりごろになると、中国やシベリアなどと関係の深い、高度な製作技術でつくられた細石器や神子柴型石器のような狩猟具が生みだされます。

縄文時代

およそ一万二〇〇〇年前になると、大陸から離れて日本列島が形成されます。このころ列島内に、栽培に適する米やコムギなどの植物がなく、飼育に適するウシ・ウマなどの動物がいなかったことが、その後の日本列島の歴史や文化に大きな影響をあたえていきます。

粘土で焼きあげた縄文土器を使い、

弓矢で鳥やけものを狩り、釣り針や銛で魚をとり、落葉広葉樹の森から木の実を集める、狩猟採集の縄文時代が始まります。

縄文時代はおよそ一万年もの長い期間です。そのため、そのなかを

①草創期（一万二千～九千年前）
②早　期（九千～七千年前）
③前　期（七千～五千年前）
④中　期（五千～四千年前）
⑤後　期（四千～三千年前）
⑥晩　期（三千～二三〇〇年前）

の六時期に分けています。

最初の縄文土器はものを入れるうつわではなく、ものを煮るための道具で、丸底かとがり底の土器でした。中期になると、八ヶ岳山麓などで落葉広葉樹の森を舞台に、豊かな山の幸を活用して当時としては大きな集落ができました。豪華な縄文土器をつくり、人口もふえます。八ヶ岳山麓に代表される中央高地は、当時日本列島一の人口密集地帯でした。

しかし、次の後・晩期になると、気候の寒冷化にともなって、八ヶ岳山麓など高地の遺跡数は急激に減少し、千曲川などの河川流域にも分散するようになります。祭りのために石を大量に使用した施設があらわれ、石をみがいてつくる祭りの道具が数多くみられ、土器以上に石に関心が出てきたことを示しています。

弥生時代

およそ二三〇〇年前になると大陸から九州北部に金属器をともなう稲作文化が伝わり、その二〇〇年後に長野県の地域でも稲作の暮らしが始まります。この弥生文化の到来により、縄文以来の伝統が薄れていきます。

弥生中期（二〇〇〇年前ころ）の長野県の地には、八ヶ岳とそれに続く筑摩山地を境にして南北の地域差がはっきりしてきます。北の千曲川から犀川水系にかけては赤い顔料を塗った箱清水式土器をつくり、沖積地での耕作に木製農耕具を用いますが、南の天竜川水系では中島式土器をつくり、段丘での耕作に石製農耕具を使っています。

耕地を開き、用水を利用して定住するようになると、暮らしは作物のでき具合に左右されますので、つねに天文や気象に関心をもった生活が一般化してきます。一年間の時を刻む節目には農作業にかかわる祭りがおこなわれ、卜占骨でうらなったり、銅鐸や銅剣などの青銅器を祭りの道具として使ったりして、年中行事が生まれるようにな

赤米の稲穂　長野市篠ノ井石川
弥生時代に栽培された稲に似て、長い芒がある。実ったものから籾が落ちて、翌年また発芽する。

木曽馬　木曽郡開田村
体高が125～140cmと中型で、日本の風土に適応した種類の馬である。古墳時代の馬に体型が似ている。

ります。

生産がふえるのにともないムラびとのなかに身分の差が生まれ、祭りをとりしきったムラ長のような指導者も登場してきます。こうしたムラ長が死ぬと、まわりを溝で囲む方形周溝墓などにほうむられるようになります。

土地や水などをめぐってムラのあいだで争いがおき、防御のため、ムラのまわりを濠で囲んだ環濠集落や高地に設けた集落が登場してきます。

古墳時代

四世紀の中ごろになると、弥生文化が栄えた長野盆地の南部に、森将軍塚古墳や川柳将軍塚古墳のような前方後円墳がつくられます。森将軍塚古墳から出土した三角縁神獣鏡は、近畿地方の大和政権との密接な関係を告げるものです。また、鏡や剣・玉によって、ほうむられた人（被葬者）は祭りや政治をつかさどっていたことがわかります。

五世紀以降になると前方後円墳は小さくなり、下伊那や諏訪、小県地方などにもつくられるようになり、とくに下伊那の古墳には金メッキをした武具や馬具をもつ武人的な被葬者があらわれます。

五世紀中ごろから石を積み上げてつくり、天井が屋根形の合掌形石室をもつ積石塚古墳があらわれます。これは、朝鮮半島から渡来した人びとのものといわれ、半島系の冠や耳飾りなどがみられるようになります。半島からはまた、カマドや窯で焼く須恵器、馬や馬具も伝えられ、日常生活のうえでも大きな変化をもたらしました。とくに長野県の馬具の出土数は全国一で、全体の二〇％を占めています。長野県の地がいかに馬の飼育が盛んで、騎馬文化が栄えたかがよくわかります。

歴史の意味

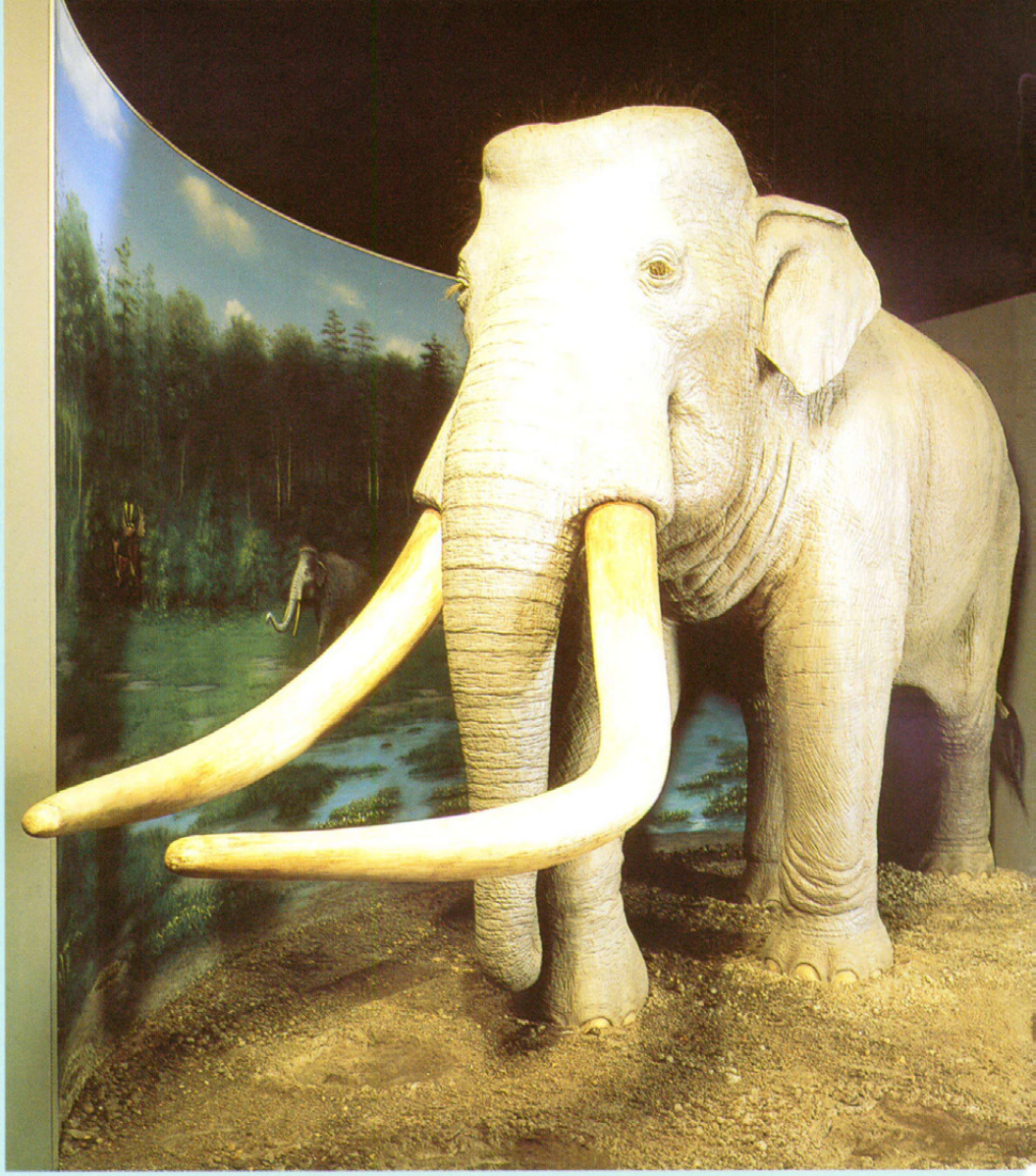
イギリスの歴史学者のA・J・トインビーは、「歴史とは後ろ向きになって、未来に向かって歩いていくようなものである」といい、また「過去における経験は、未来を照らすために私たちに得られる唯一の光である」と述べています。

この世に歴史家が存在しているのは、人間の思いこみによる歴史的な記憶を避けるためでもあります。

現代にたって過去を振りかえるとき、過去の歴史のなかには未来への指針となるものがいっぱい見えてきます。歴史で忘れてはいけないことは、歴史の資料の背後にはいつも、精いっぱい生きてその時代の歴史を築きあげた人間たちがいるということです。

テーマ1

環境



ナウマンゾウ　長野県立歴史館

環境の変化に適応した人びと

上：冷害のため青刈りされる稲
飯山市　1993年10月
右：猛暑のため枯れてしまったリンゴの枝　上水内郡三水村　1994年8月
（信濃毎日新聞社提供）

◆環境とわたしたち

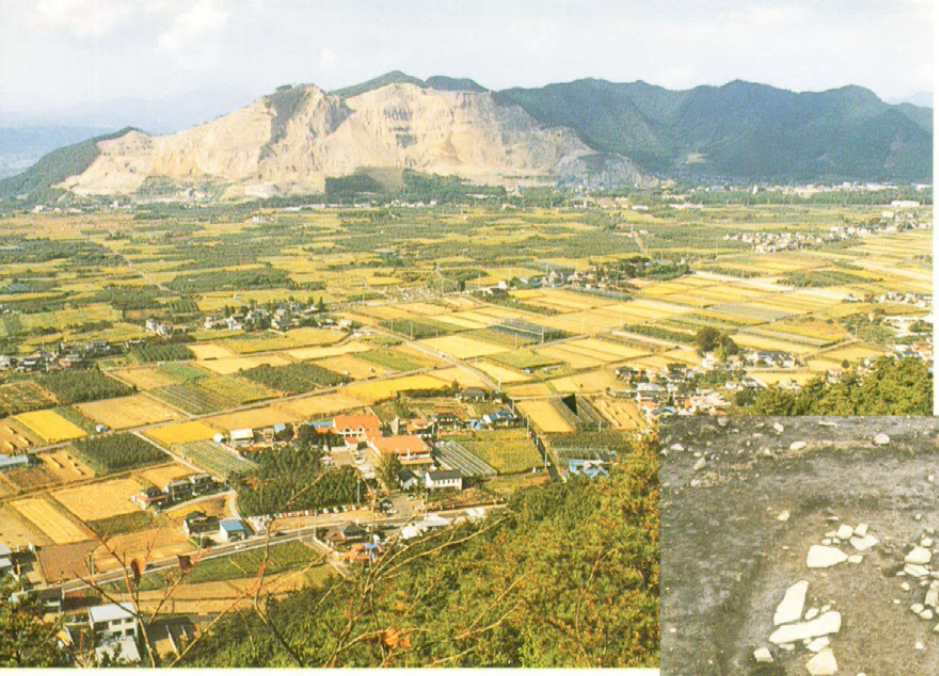
環境ということばから、なにを思い浮かべますか。公害、大気汚染、オゾン層の破壊、地球温暖化……、そして「地球にやさしい」エコマーク。こんにち、環境問題は全世界の重要な課題です。

一九九三年の夏をおぼえていますか。低い気温、多い雨量、短い日照時間という気象条件が重なったこの夏は、八〇年ぶりの冷夏となりました。米は戦後二番目の大凶作で、その秋から輸入米が売りだされました。ところが、翌九四年の夏は、山梨県甲府市などで三九・八度を記録する猛暑となりました。降水量は平年の半分以下で、節水がさけばれ、農畜産物は大きな打撃を受けました。九五年の春は、猛暑の影響でスギ花粉が例年になく多量に飛散し、ひどい花粉症で苦しむ人がおおぜい出ました。

わずか三年のあいだに、環境の変化がわたしたちの暮らしや体に大きな影響をあたえることを、みんなが実感しました。

◆寒冷気候への適応

ヒトの祖先はおよそ四〇〇万年前、アフリカ大陸にあらわれました。その後猿人から原人に進化したヒトは、火を使うことをおぼえ、北緯四〇度の寒冷地にも住みつきます。約五〇万年前には、北京原人の仲間が陸続きの日本列島へ渡ってきました。最寒冷期



上：敷石産地の小布施町雁田山　▽印が八幡添遺跡
右：縄文時代中期末の敷石住居跡

上高井郡高山村八幡添遺跡（高山村教育委員会提供）
約4,000年前、縄文人が住居の床に敷いた平石の産地は採石場となり、粉じんなどの公害防止や自然保護問題がおきている。

には現在より七度も平均気温が低かったこともあります。火山灰が降る寒く乾燥した気候のなかで、人びとはナウマンゾウなどの大型動物をねらって、狩りの道具と技術を発達させました。

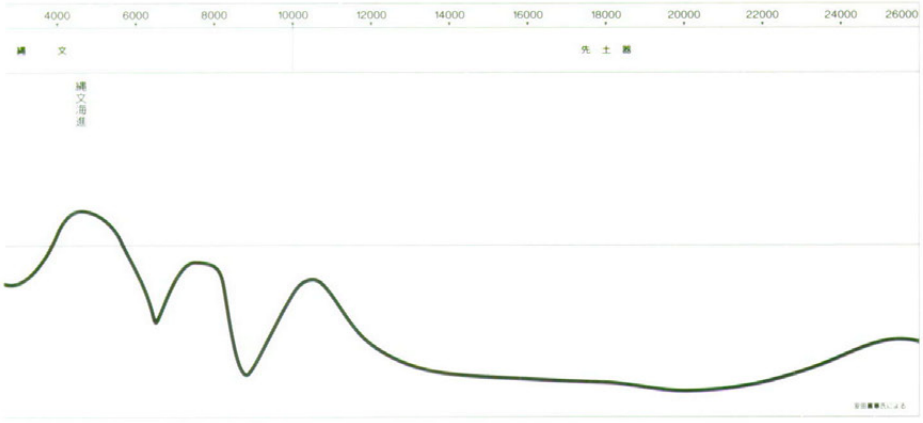
礫器などのような原始的な石器から、約三万年前以降にはナイフ形石器のように形が整い、柄をつける道具に変わってきます。よりするどい切れ味を求めて、黒曜石などの材料をはるか遠方の限られた産地から手に入れる方法さえみつけました。

◆温暖な自然への適応、そして環境破壊

約一万二千年前、日本列島は暖かく湿潤な気候に変わります。針葉樹林は豊かな木の実をつける落葉広葉樹の森に変わり、その林床には山菜やきのこが育ち、シカやイノシシのすみかとなりました。氷河がとけて海が広がり、絶好の漁場ができました。そして土器が発明され、縄文時代が幕をあけます。気候の変化に左右されながらも、それぞれの地域の自然環境に適応して、資源をとりつくさなかった縄文文化は、およそ一万年間続きました。

約二三〇〇年前、西日本に稲作が伝わり、弥生時代が始まります。鉄器で森が切り倒され、水田が開かれました。次の古墳時代には、鉄の精錬や、窯を使った焼き物の生産が伝わり、たきぎの消費が増大して、森林破壊や土壌流失が起こり、出水量が変化した地域もあります。人びとが自然に働きかけて暮らしを豊かにした歴史は、環境破壊の歴史という一面もともなっていたのです。

大むかしの気候変化はどうやって調べるの



現在から約3万年前までの気候の変化　0°は現代の年平均気温を示している。
花粉の種類、湖水の結氷期、作物の出来ぐあい、古文書の記録などから、古い時代の気候が復原される。

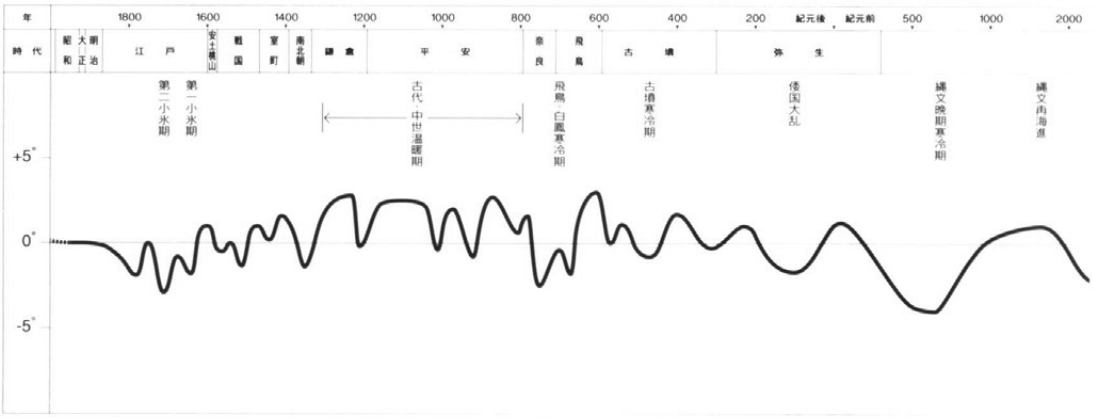
◆古い気候を調べる

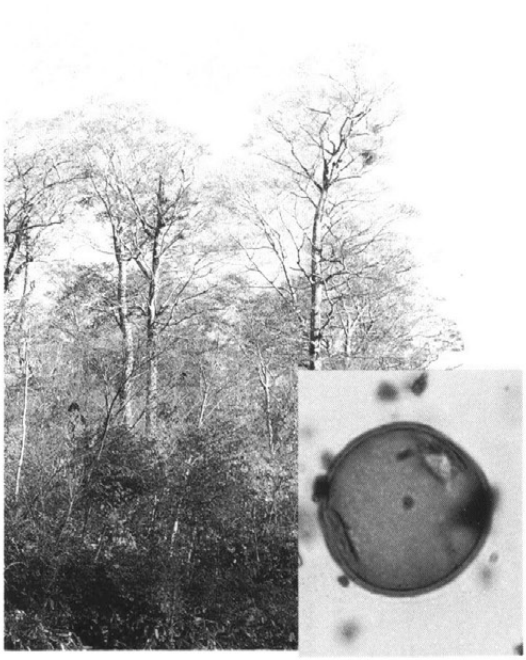
長い人類の歴史は、多かれ少なかれ、自然とかかわりながら歩みを進めてきました。気候は、長い期間をとると、さまざまに変化します。数万年以上のスケールで氷期と間氷期が訪れたり、数十年ほどの短い時間のなかでも、温暖になったり、寒冷になったりします。こうした変化を気候変動とよんでいます。

先土器時代や縄文時代などの古い時代の気候変化を明らかにするには、花粉化石の分析や氷河の氷床コアの酸素同位体分析（原子番号が同じで質量数が異なる核種を同位体という）などが用いられます。

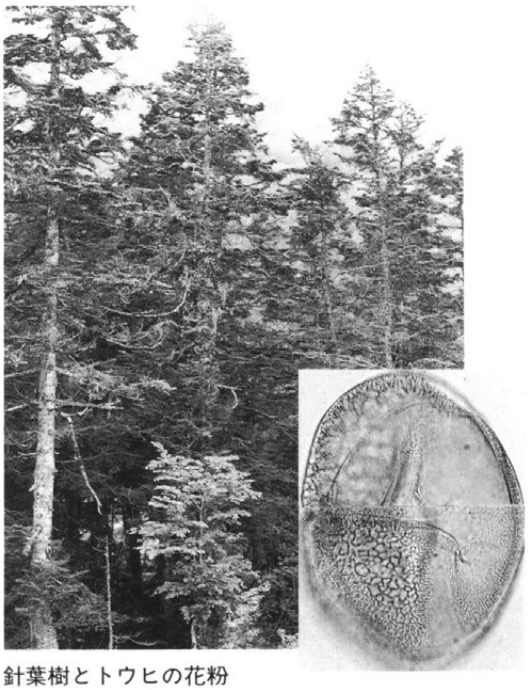
もっとも一般的なのは、植物の花粉がくさらないことを利用した、花粉分析による気候変化の解明です。花粉分析する資料は、堆積した土の中から採取します。信濃町野尻湖立が鼻遺跡の発掘調査や野辺山高原矢出川湿原のボーリング調査などで花粉が得られました。

まず最初に、何層かに堆積した土の層に含まれている炭化した木片などから、それぞれの土の層の年代を測定します。つぎに年代のわかったそれぞれの土層の





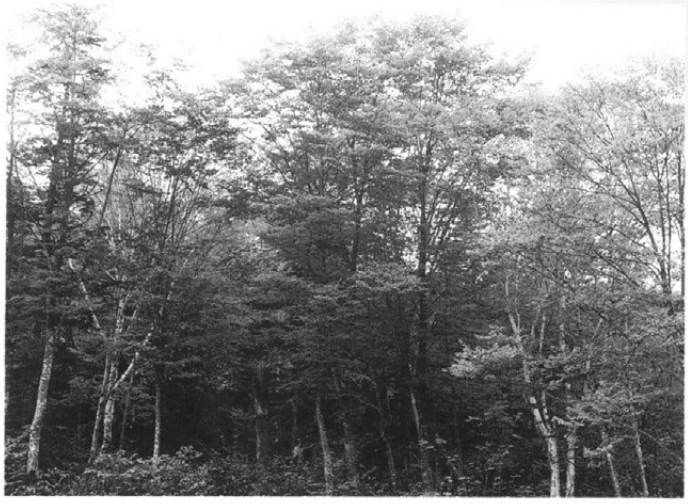
ブナ林とブナの花粉



針葉樹とトウヒの花粉

先土器時代の自然環境
下高井郡山ノ内町志賀高原
湖と湿原、その背後に針葉樹の森が広がる景観は、ナウマンゾウがすんだ先土器時代の自然のようすに似かよっている。

雪におおわれた妙高山　新潟県妙高高原町
日本列島が形成されると、日本海の暖流から蒸発した湿気を吸った季節風が高い山にあたり大雲を降らせた。この多雪化は縄文文化をはぐくむ基盤となった。



落葉広葉樹の森　北安曇郡小谷村栂池高原
縄文時代になると、針葉樹にかわってクリ、クヌギ、クルミ、トチなどの明るい森が広がり、縄文人の生活の舞台となった。

中に含まれている花粉を顕微鏡で調べ、その当時生えていた草木の種類と量を調べます。こうして、それぞれの年代における気候が復原されるのです。

◆解明された気候変化

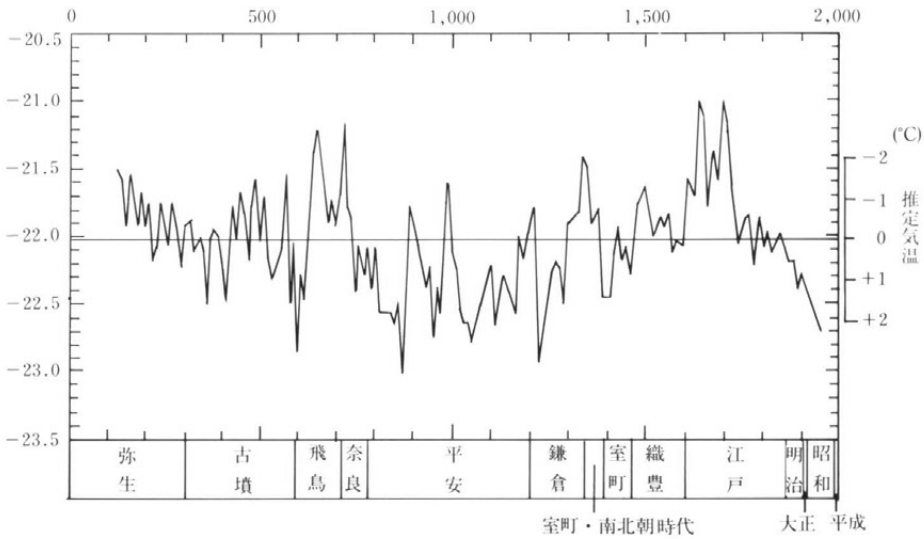
一万二〇〇〇年前ごろに最終氷期が終わると、やがて日本海が形成され、日本列島が成立しました。このころ、それまでの寒冷で雨の少ない大陸性気候にかわって、とくに冬の日本海側には大雪が降るようになり、落葉広葉樹の森が繁茂するようになりました。

文字記録のある歴史時代は、降雨や降雪の量、作物の収穫量、植物の開花時期、河川や湖沼の結氷、湖の水位の変動や風水害などの記録から、気候変動が明らかになります。

最近では縄文杉で知られる屋久杉の炭素同位体比の変動から、気候変化が解明されつつあります。それによると、九〜一三世紀のあいだは現在より一〜二度ほど温暖でした。逆に、七世紀代と、一六世紀後半から一九世紀中ごろまでは寒冷でした。とくに後者の寒冷化はいちじるしく、小氷期といわれています。

屋久島の縄文杉　鹿児島県屋久町

根回りが43mもあるこの屋久杉は、樹齢が7200年とされ、縄文杉とよばれている。



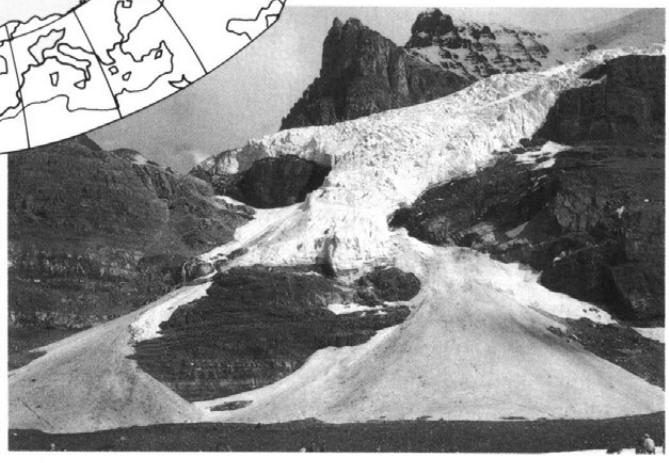
屋久杉からわかった気候変動

（北川浩之「屋久杉年輪の炭素同位体比変動からみた歴史時代の気候変動」1993年）

屋久杉の年輪から飛鳥時代、平安時代前期、江戸時代前期は暖かく、古墳時代の終わりごろや鎌倉時代の初期は寒かったことがわかる。

氷河時代に人びとはどうやって暮らしていたの

北半球をおおった氷河の広がり
約1万8000年前
（A・ホームズ『一般地質学II』1984年東京大学出版会を修正）



現在の氷河
カナダ・アルバータ州アサバスカ氷河（『日本の自然⑦』1987年平凡社）

◆氷河はいま、どのようなかたちをしているか

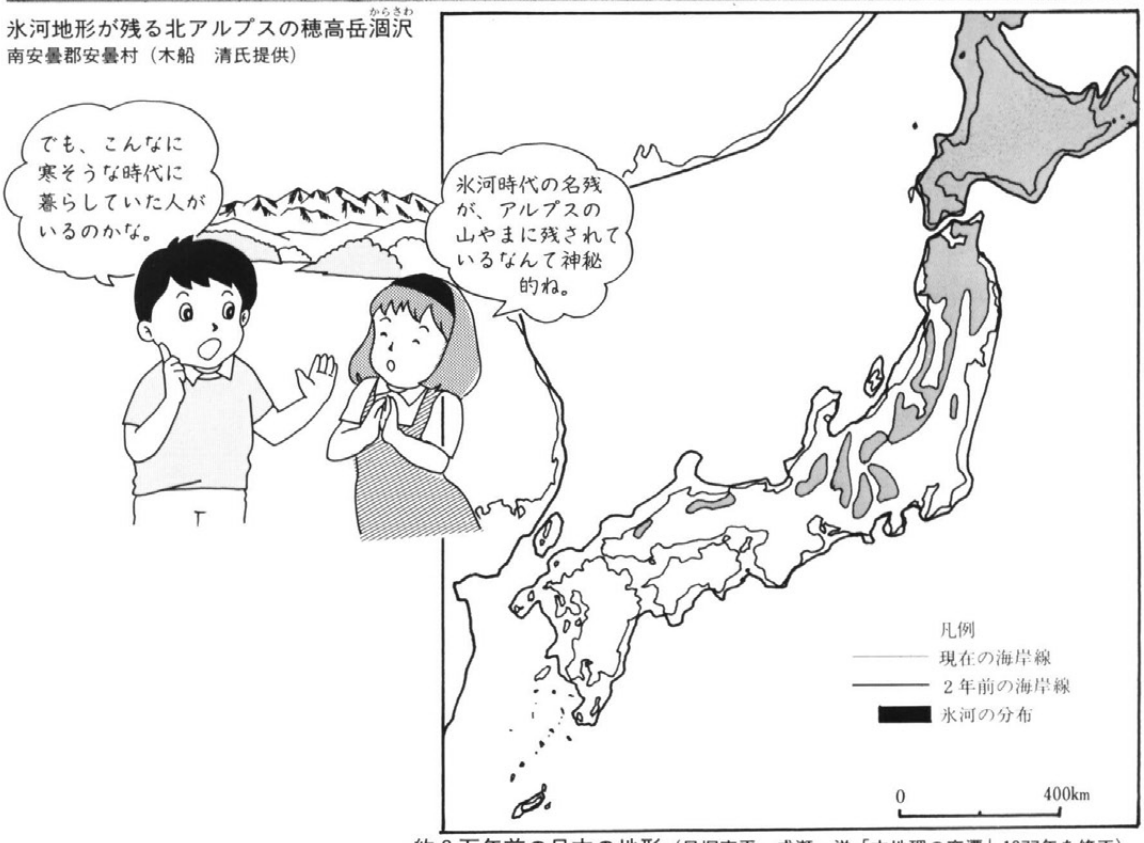
氷河期とか氷河時代という名称は、氷河が地球上の中緯度付近までをおおった寒冷な氷期と、南北両極付近だけにしりぞいた温暖な間氷期が、交互に訪れる時期の総称です。現在、氷河は陸地の約一一パーセントをおおっていますが、もっとも寒冷だった二万年前は、約三五パーセントに達していました。

氷河のようすを知る手がかりは、地表面と地中の両方にあります。地表面では、大きい順に氷床、氷冠、谷氷河、圏谷（カール）氷河とよんでいます。長野県でも日本アルプスにカールやU字谷がみられ、かつて氷河があったことがわかります。また、地中にある手がかりは動物の骨、化石や花粉です。ライチョウやトワダカワゲラなどは、氷河時代にすんでいた動物が生き残っているものです。

◆氷河時代の人びとと大型動物

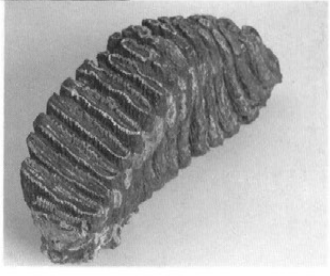
信濃町立が鼻遺跡では、約四万～二万年前の地層から、石器のほかにナウマンゾウやオオツノシカの骨を加工した道具がみつかりました。氷河期のなかでもっ

氷河地形が残る北アルプスの穂高岳涸沢（からさわ）
南安曇郡安曇村（木船　清氏提供）



約2万年前の日本の地形（貝塚爽平・成瀬　洋「古地理の変遷」1977年を修正）

上：ナウマンゾウやオオツノシカを解体した場所　上水内郡信濃町仲町遺跡
（野尻湖遺跡調査団提供）
氷河時代の狩人は、大型動物を湿地や沼地に追いこんで仕留めていた。野尻湖畔には、動物を解体した場所がいくつか発見されている。



右：ナウマンゾウの臼歯　複製
（原資料　信濃町立野尻湖博物館蔵）

とも寒い時期でも、大型動物とともに、道具をつくりそれを狩りしていた人びとがいたのです。

これらの大型動物は、寒冷気候で海水面が下がり、陸橋で今の日本列島が中国大陸とつながっていたので、日本に渡ってきたものと考えられています。狩人たちは、簡単な道具をたずさえて、移動する動物を追い求めて暮らしていたようです。

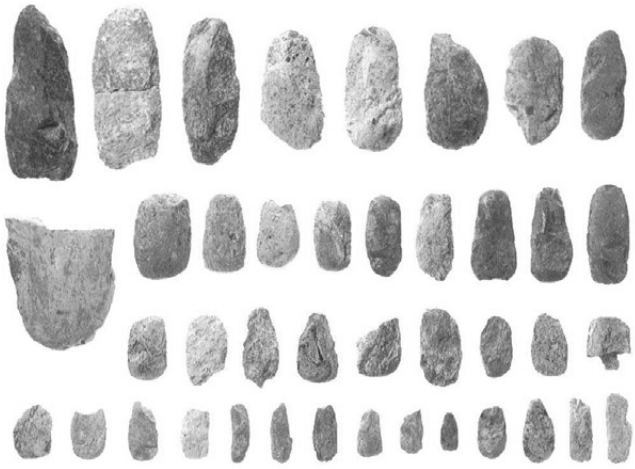
◆氷河時代の暮らしと交流

信濃町日向林B遺跡からは、ナウマンゾウやニホンジカの脂肪のついた石斧が発見され、こうした道具が木をきるだけでなく、大型動物の解体にも使われていたことがわかりました。また、石器のつくりかすも大量にみつかり、野尻湖周辺で狩りをする人びとが、石器製作をくりかえしていたこともわかりました。

使われた石器の材質をみると、野尻湖周辺で採取されたものは少ないようです。和田峠周辺の黒曜石はもちろん、なかには富山県方面の蛇紋岩や新潟県方面の安山岩などもあります。狩人たちは、よりよい石材を求めて、数十キロメートルにもおよぶ旅をしたのでしょう。

妙高山と野尻湖　▽印が日向林Ｂ遺跡
（長野県埋蔵文化財センター提供）

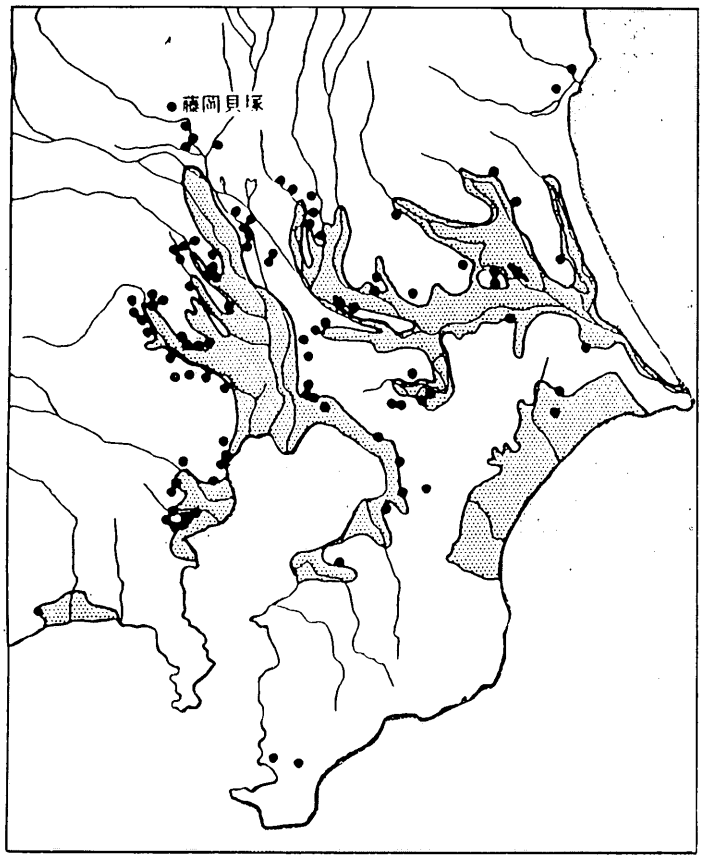
石器づくりをした遺跡
上水内郡信濃町日向林Ｂ遺跡
（長野県埋蔵文化財センター提供）
白い線に囲まれたなかに、石斧やそれをつくったときの石くずが集中していた。環状に並んでいるのがわかる。



大型動物を解体した石斧　日向林Ｂ遺跡
（長野県埋蔵文化財センター提供）

石器の材料が運ばれてきたところ
（長野県埋蔵文化財センター『野尻湖周辺の先土器文化』1995年）
先土器時代の人びとは、石を運ぶだけでなく、暮らしに役立つさまざまな情報を遠くの人たちと交換していた。

縄文時代の気候は暖かかったの



縄文時代前期の関東地方の海岸線
（『探訪縄文の遺跡　東日本編』1985年　有斐閣）
現在の都心部には海水が侵入し、現在の海岸線から約75kmはなれた栃木県藤岡町にも貝塚が残された。

◆縄文時代の気候

およそ一万年続いた縄文時代には、暖かな時期や寒い時期がありました。一番暖かかったのは前期から中期にかけてで、平均気温は今より二度ぐらい高かったといわれています。いっぽう、中期の終わりから後期にかけては、気温が低下して小氷期とよばれています。

温暖な気候になると、大地は氷河期のモミやツガなどの針葉樹にかわって、ヤマグリ、オニグルミやドングリの実がなるコナラ、クヌギなどの広葉樹の森に変化します。こうした森には当然、野生動物たちも群がります。いっぽう、気候が冷涼になると木の実も少なくなり、食料危機が深刻になりました。

◆豊かな森に暮らした縄文人

茅野市の与助尾根遺跡は、温暖な縄文中期の遺跡で、標高一〇七〇メートルの八ヶ岳の台地に営まれています。周囲にはクヌギやコナラの森が広がり、台地の南側には清水が湧く低湿地がありました。

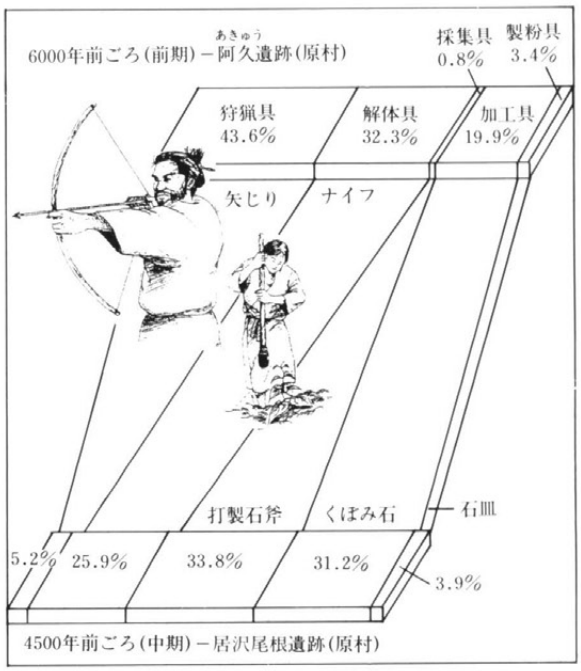
縄文人は、煮炊きができる土器を発明し、植物を食料として利用することで定住生活を可能にしました。

広葉樹林に囲まれた縄文のムラ　茅野市与助尾根遺跡
（茅野市尖石博物館提供）

矢じり（石鏃）

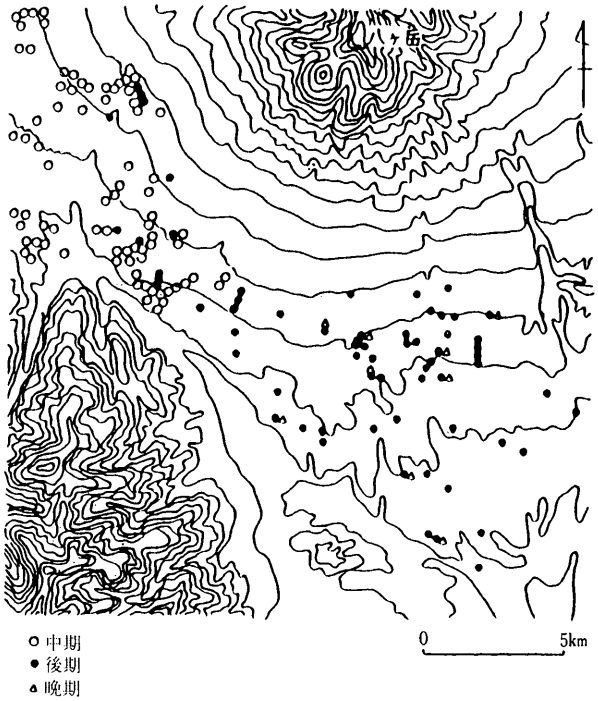
土掘り具（打製石斧）

石皿と磨石　以上東筑摩郡明科町北村遺跡
（長野県立歴史館）

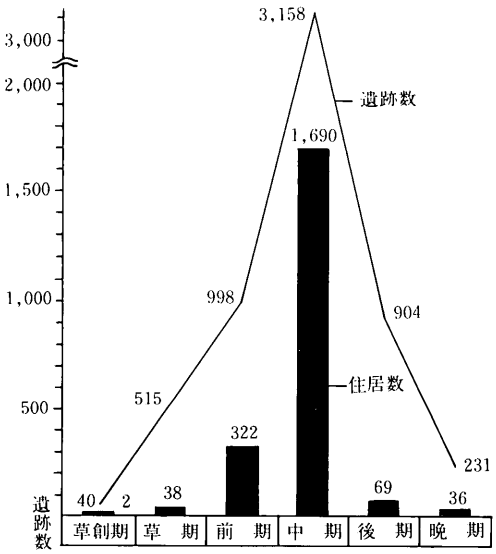


石器の種類別割合の移り変わり

前期は矢じりなど狩りの道具が中心だが、中期になると球根類などを採集するための土掘り具や、木の実などを粉にする石皿・磨石が多くなる。



八が岳山麓の縄文時代中期～後期の遺跡
（『図解日本の人類遺跡』1992年　東京大学出版会）
八が岳の西南麓に広がる台地上には、縄文時代の遺跡が点在している。等高線の位置とくらべると、後期の遺跡は中期よりも低い場所にあることがわかる。



長野県における縄文時代の遺跡・住居数
（『長野県史　通史編1』1988年）

とくに中期は、植物の採集具である打製石斧や加工に使う石皿、磨石の出土比率が高まります。与助尾根の人びとも、周囲の森にある豊かな自然の贈り物を生活の糧としてくらしていたことでしょう。

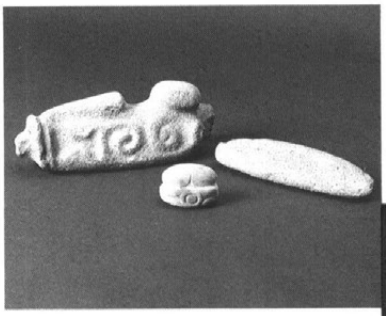
長野県は、こうした中期の遺跡が三〇〇〇か所をこえ、人口は約二万四〇〇〇人くらいだったと考えられています。全国有数の縄文集落密集地域だったのです。

◇気温の低下と縄文人

気温が低下しはじめた縄文後期になると、与助尾根をはじめ八ヶ岳山麓にあった四〇〇あまりの集落は、三分の一以下に激減してしまいます。新たな食料資源を求めて住み慣れた土地を離れ、標高の低い土地へ移動していったのでしょう。竪穴住居が環状に並ぶ大きな集落は姿を消し、小規模なものになります。

このころは、数千、数万の河原石を敷き並べた広場がつくられます。また、土版・石刀・独鈷石など、狩りや植物採集に直接かかわりのないさまざまな道具もつくられます。おそらく、きびしい暮らしをしのぐため、石を並べた場所でさまざまな道具を使いながら、祭りや祈りをおこなったのでしょう。

祈りと祭りの場　伊那市百駄刈遺跡
無数の石のあちこちに、新しい命の誕生や野山からの豊かな恵みを願う石棒が林立している。

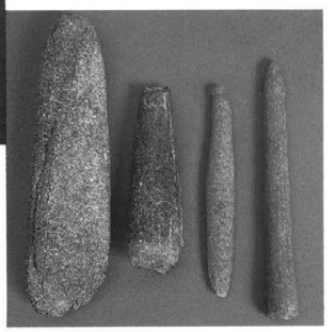


用途不明の石製品
右：石冠　下伊那郡高森町鐘鋳原遺跡
（高森町立歴史民俗資料館蔵）
中：石冠　上田市下前沖遺跡
（上田市立信濃国分寺資料館蔵）
左：御物石器
木曽郡上松町吉野出土　長さ34.4cm
（合戸一美氏蔵）

仮面　東筑摩郡波田町権現台
出土　高さ15.6cm　複製
（原資料　東京国立博物館蔵）

土偶
上伊那郡辰野町新町泉水遺跡
高さ20cm　複製
（原資料県宝　辰野町立美術館蔵）

ミニチュア土器
東筑摩郡明科町北村遺跡
（長野県立歴史館）



石棒　東筑摩郡明科町北村遺跡
左：長さ37cm（長野県立歴史館）

シナノで稲作が始まったのはいつごろなの

上：炭化物の出土状態　右下：炭化物　諏訪市荒神山遺跡　左下：エゴマ　東筑摩郡麻績村根尾

◆縄文時代の栽培植物

縄文時代は、狩りや採集をして自然にある動植物に依存する食生活を送っていました。ところが一九七四年に諏訪市の荒神山遺跡でエゴマ（荏胡麻・シソ科の作物）が出土しました。その後、全国各地からヒョウタン、緑豆などの栽培植物が発見されています。

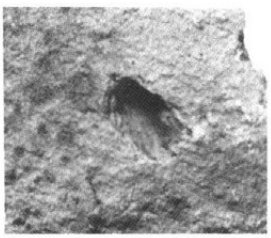
一九九三年には、岡山県総社市の南溝手遺跡から出土した縄文土器の土のなかから、稲の花粉化石が発見されました。約三五〇〇年前には、日本列島のなかにすでに稲が持ちこまれていたのです。

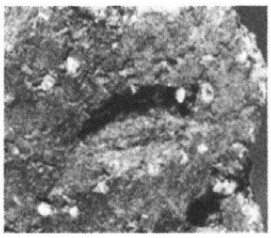
茅野市の御社宮司遺跡や岡谷市の経塚遺跡の縄文時代晩期末（約二三〇〇年前）の土器には、籾のくっついた跡が残されています。このころまでには、長野県にも稲がもたらされていたようです。

◆はじめの米づくり

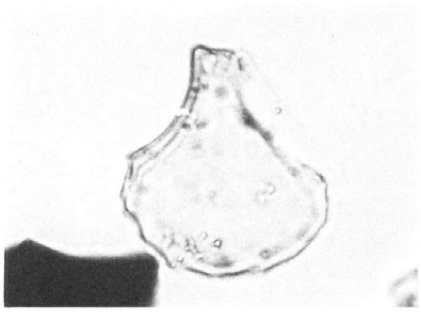
縄文人は、食料を手に入れやすい森に囲まれた台地や丘陵の上に集落をつくりました。ドングリやトチの実は、アクを抜いて食べられるようにします。中野市の栗林遺跡では、集落の近くに湧き水を利用したア

ドングリのアク抜きをするための水さらし場　中野市栗林遺跡

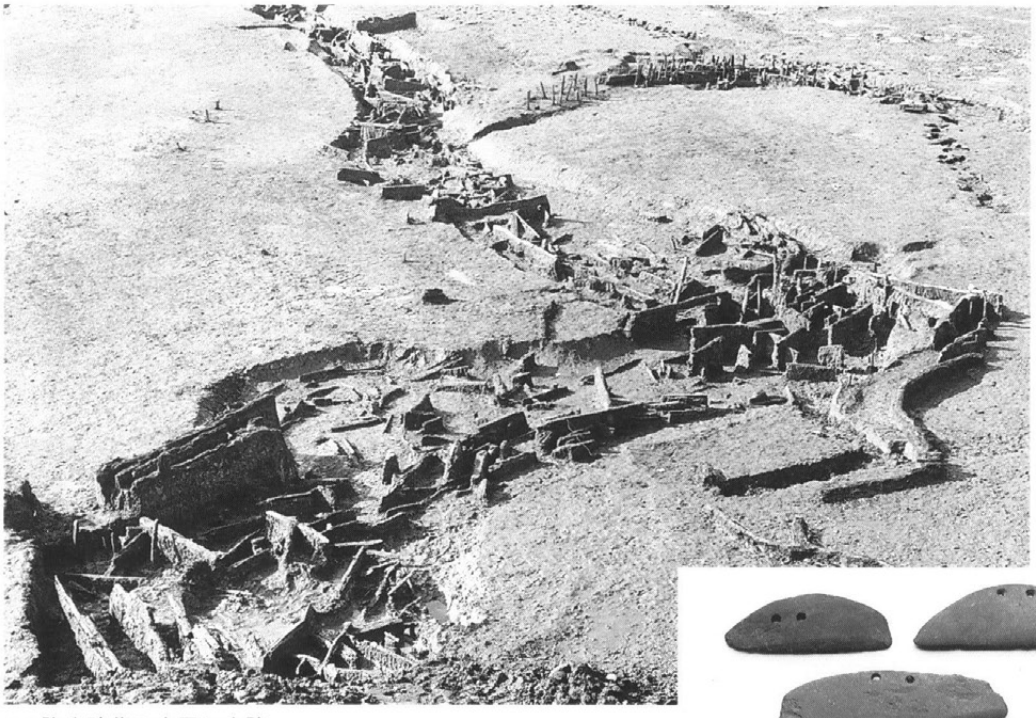


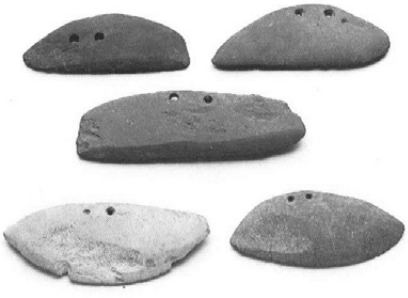


土器についた籾の跡　右二つ：岡谷市経塚遺跡　左二つ：茅野市御社宮司遺跡



顕微鏡でみた稲の花粉化石　稲の花粉は、イチョウの葉っぱの形をしたガラス質の殻に守られている。プラントオパールとよばれるこの殻によって、稲があったかどうかを確認できる。





上：弥生時代の水田と水路
右：稲の穂首を刈り取る石包丁　長野市石川条里遺跡
（長野県埋蔵文化財センター提供）

ク抜き施設が発見されています。

弥生時代のはじめに稲作が伝わると、縄文時代に利用してきた湧き水の近くの湿地を利用して、簡単な水田がつくられます。長野県では、こうした初期の水田はまだ発見されていませんが、長野市伊勢宮遺跡や松節遺跡など、当時の集落の位置と規模をみると、小さな水田が出発点だったと考えられます。

◆発達する稲作

やがて、弥生時代中期後半から後期のはじめにかけて、広大な後背湿地を利用した水田がつくられます。長野市の石川条里遺跡では、水田の区画や水路の跡などが確認されました。水田跡の標高は三四〇～三四五メートルで、弥生時代の稲作地域のなかでは、現在、わが国で最も高い場所です。まだ、品種が統一されない稲の穂を、実った順に石包丁で刈り取っていたのでしょう。

岡谷市橋原遺跡では、五八軒の弥生時代後期の住居跡が発掘され、そのうち三五軒に食料が残っていました。そのなかの火事で焼けた住居跡から炭化したコメ・アワ・マメがみつかり、とくにコメは約三五万粒もあり、注目を集めました。

上：竪穴住居跡に残る炭化米
左：土器のなかにつまった炭化米
岡谷市橋原遺跡（岡谷市教育委員会提供）

表1　橋原遺跡から出土した食料（岡谷市教育委員会『橋原遺跡』1981年）

単位：粒数、※は重量から粒数を計算

住居跡	米	ムギ	ヒエ・アワ	豆	ドングリ	クリ	クルミ
第10号住居跡	370	0	4	0	0	0	0
第58号住居跡	571	0	18	0	0	0	0
第59号住居跡	350,000*	0	2,100*	0	0	0	0
第64号住居跡	314	0	1	5	0	0	0
合　計	351,427	1	2,301	185	10	29	1
その他	ソバ、アワ、ヒエ、エゴマ、アサ、モモ、ブドウ属、サクラ属						

野辺山高原の先人に学ぶ

◆寒冷地の先人たち

八ヶ岳の東南麓にある野辺山高原は、現在では全国でも有数の高原野菜の産地として知られています。しかし、標高一三〇〇メートル以上の高冷地で、これまで農業を営む人びとの苦労は、並みなみならぬものでした。

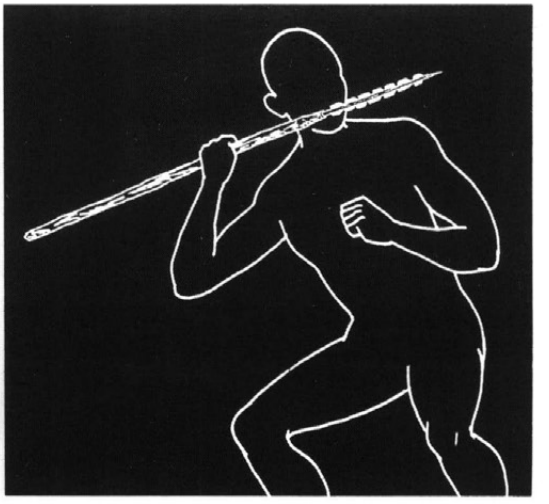
野辺山高原の西南端を流れる矢出川の流域には、多数の遺跡が確認され、矢出川遺跡群とよばれています。約一万四千年前の先土器時代、人びとはここで長さ三センチ、幅数ミリという長方形のちっぽけな石器（細石器）を、狩猟の道具として使っていました。この石器は骨でつくった柄に、ちょうど安全カミソリの替刃のように植えこんで使うもので、刃がつぶれれば新しいものに簡単にとり替えることができるという利点をもっていました。

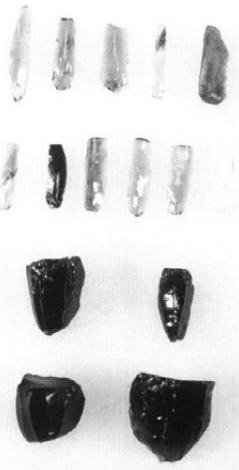
こうした石器を使う文化は細石器文化とよばれ、旧石器（先土器）時代から新石器（縄文）時代に移り変わる過渡期の特徴とされています。矢出川遺跡は、日本で最初に細石器文化の存在が確認された遺跡として知られているのです。

◆先人から学ぶ

野辺山高原の開拓が本格化したのは、第二次世界大戦後です。食料不足を補うため、政府が開拓事業をおし進めたことに始まります。しかし、高冷地のきびしい自然条件のもと、数年にして入植戸数の七〇パーセントもの人びとが脱落したのでした。

そんななか、ひとりのおばあさんが矢出川遺跡の調査を目の当たりにして、胸を打つお話をしてくださいました。「わたしたちは亡くなった主人とともにこの土地に来て、ときには死んでしまいたいほどの苦労を味わいました。ふと、この野辺山で生活をしたのは私たちが最初なのか、などと思うことがあります。そうしたときに皆さんが来て、野辺山には私たちよりずっと大昔に生き抜いた人たちがいたと教えていただいたとき、なにかほっとした気持ちがしました」。苦労したのは自分たちだけではないとたいへん勇気づけられた、というのです。先人の足跡は、今もしっかりと生き続けていたのです。





細石器と装着方法　南佐久郡南牧村矢出川遺跡（左：由井茂也氏蔵・右：ムラヤマ提供）

テーマ2

災害

荒神山遺跡の地割れ　諏訪市

災害をしのいだ人びと

長野県西部地震による地すべり
1984年９月14日（信濃毎日新聞社提供）

諏訪湖の氾濫　1983年９月28日（諏訪市教育委員会提供）

◆自然災害のおそろしさ

地震、落雷、火山の爆発、長雨による崖崩れなどの自然災害は、ほとんど予告なしに突然おそってきます。しかし、人びとは災害にも負けずたくましく立ちあがろうと努力してきました。

県歌「信濃の国」に登場する御嶽山（三〇六三メートル）の南斜面に木曽郡王滝村があります。この村を中心に発生した長野県西部地震は、一九八四年九月のことでした。地震発生の一週間ほど前から長雨が続き、御嶽山の頂上から王滝村に延びる急勾配の谷は、地すべりを起こしやすくなっていました。一四日午前八時四九分ごろ、マグニチュード六・九の地震が発生しました。家いえが倒れ、道路に亀裂が走りました。まもなく、ものすごい量の土石流が二つの谷筋を一気に流れ下りました。地肌を削り、木曽ヒノキを根こそぎ倒し、民家や公民館などを押し流し、多くの尊い人命をも奪いました。

◆災害にあった遺跡はどんなだろう

火山の多い日本では火山爆発にともなう災害も多いのです。隣の群馬県には、古墳時代後期（六世紀中ごろ）榛名山二ッ岳の大噴火で、ムラがそっくり埋まった黒井峯遺跡があります。この時の噴出物はほとんどが軽石で、吾妻川の谷をへだてて北東にある

榛名山を望む古墳時代のムラ　群馬県子持村黒井峯遺跡（子持村教育委員会提供）
約1500年前の榛名山の噴火によって壊滅的な打撃を受けた黒井峯のムラは、人びとの努力によって復興を遂げた。

火山灰に埋もれた竪穴住居
群馬県黒井峯遺跡

火山灰から掘り出された古墳の石室
群馬県子持村中ノ峯古墳（桜場一寿氏提供）

黒井峯のムラ一帯に降り注ぎました。そして、わずかなあいだに二メートル余りの厚い軽石層の下に埋めつくされてしまいました。細かな火山灰は、風にのって遠く宮城県にまで達しています。

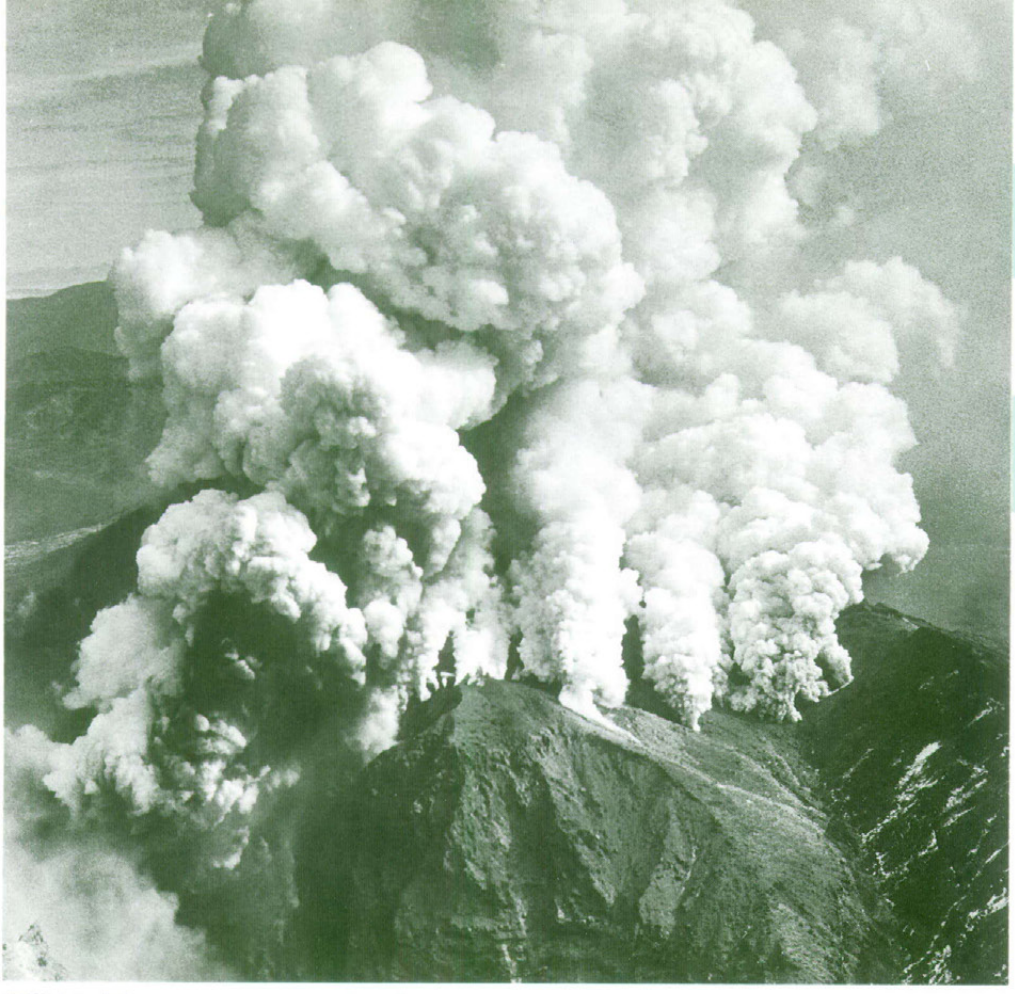
一九八二年から黒井峯遺跡の発掘が始まりました。もちろん木や植物はありませんが、約一四〇〇年前のムラのようすがそっくり出てきました。ひんぱんに使われた水汲み場への道は、よく踏み固められていましたし、くさって茶褐色になった屋根や柱や草壁の跡が軽石の層にはっきり残っていました。家畜小屋の土などを調べた結果、馬や牛を飼っていたことや水田のあぜづくりの最中に噴火が始まり、途中で作業を中止したことなどがわかってきました。

◆黒井峯の人びとはどうなったのだろう

軽石が熱くて家屋が燃えた、という跡はありませんでした。細かな軽石がしだいに家や田畑を埋めていったようです。すっかり埋まるまでのあいだに噴火のなかった日があったらしく、ムラ人は竪穴住居の中に入り、積もった軽石を掘り返して日常使っていた土器などを持ち去っています。

一九八〇年に、黒井峯遺跡のすぐ近くにある古墳が調査されています。この古墳は、軽石が積もる前につくられたのですが、軽石に埋まった後でも、亡くなった家族を横穴式石室に追葬しています。このようなことから、人びとは別な場所へ移動して生活していたことがわかります。

大昔は長野県の火山も爆発していたの



御嶽山の噴火　1979年10月28日（信濃毎日新聞社提供）

◆生きている火山

日本列島は、地球全体からみても、とても多くの火山の集まっているところです。地球全体で八三〇ある活火山のうちの一〇分の一にあたる、八三が日本列島にあります。陸地面積で、日本は世界全体の約四〇〇分の一ですからその密集度は相当なものです。

長野県内の活火山には、浅間山、御嶽山（おんたけさん）、焼岳（やけだけ）、乗鞍岳（のりくらだけ）、八ヶ岳（やつがたけ）などがあります。記録でその爆発が知られている古いものでは、浅間山が六八五年、八ヶ岳が八八八年といった例があります。最近では一九七九年に、御嶽山が爆発しています。

◆火山の爆発でつくりだされた地形

ところで、ずっとはるか昔はどうだったのでしょうか。今から約二〇〇万年前の日本列島は、大規模な隆起の時期にあたります。このころの火山活動は、噴出物がいたるところの台地の裂けめから、いっせいに噴き出すようなものだったと考えられています。それが、現在の美ヶ原（うつくしがはら）や霧ヶ峰（きりがみね）の高原をつくりだしたのです。そして、約七〇万年前、現在みられる火山地形がつく

遺跡にも、
火山爆発の痕跡が
残っているのかな。

ねえ、
これじゃあ日本中
火山だらけね。

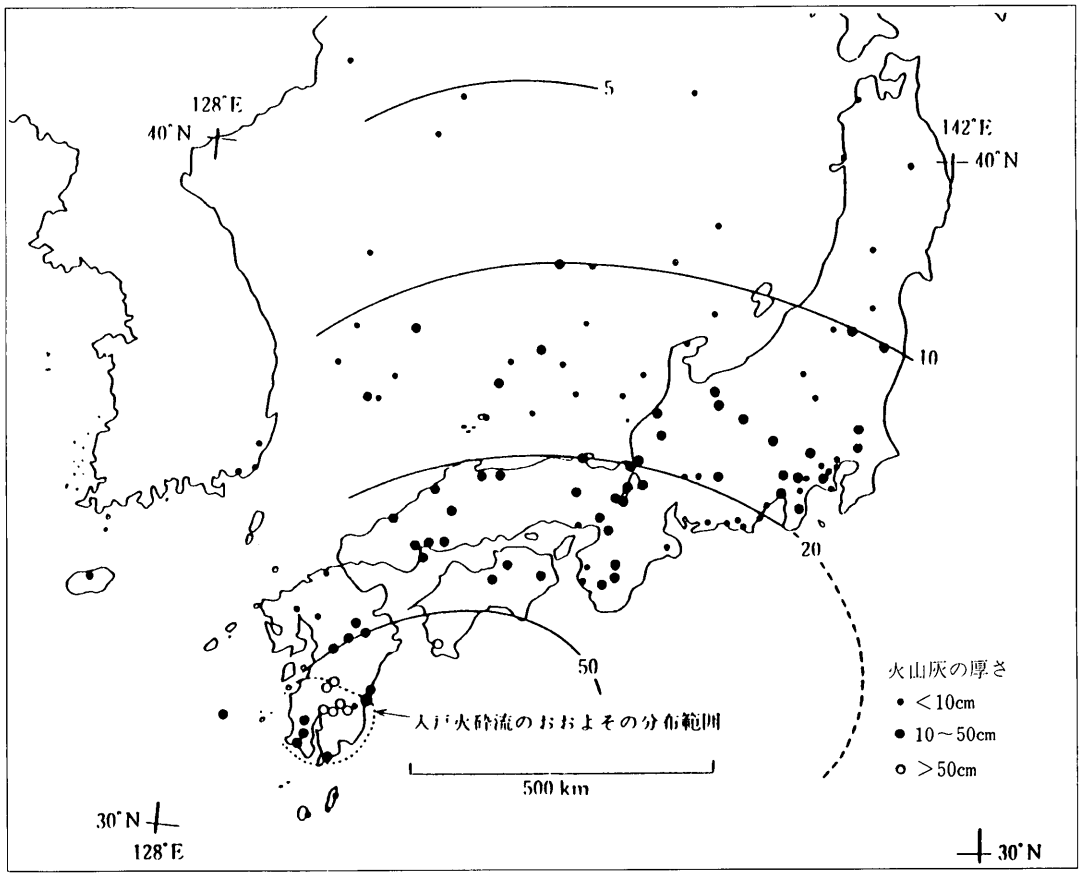
東日本火山帯

西日本火山帯

0 200 400km

日本の火山帯（『日本大百科全書』1994年小学館を修正）
・が火山の位置

上：八ヶ岳と富士山（田中俊廣氏提供）
左：阿蘇山の火口湖　熊本県（籾倉克幹氏提供）



姶良火山からの火山灰（町田　洋「火山灰考古学の最近の成果」1995年を修正）

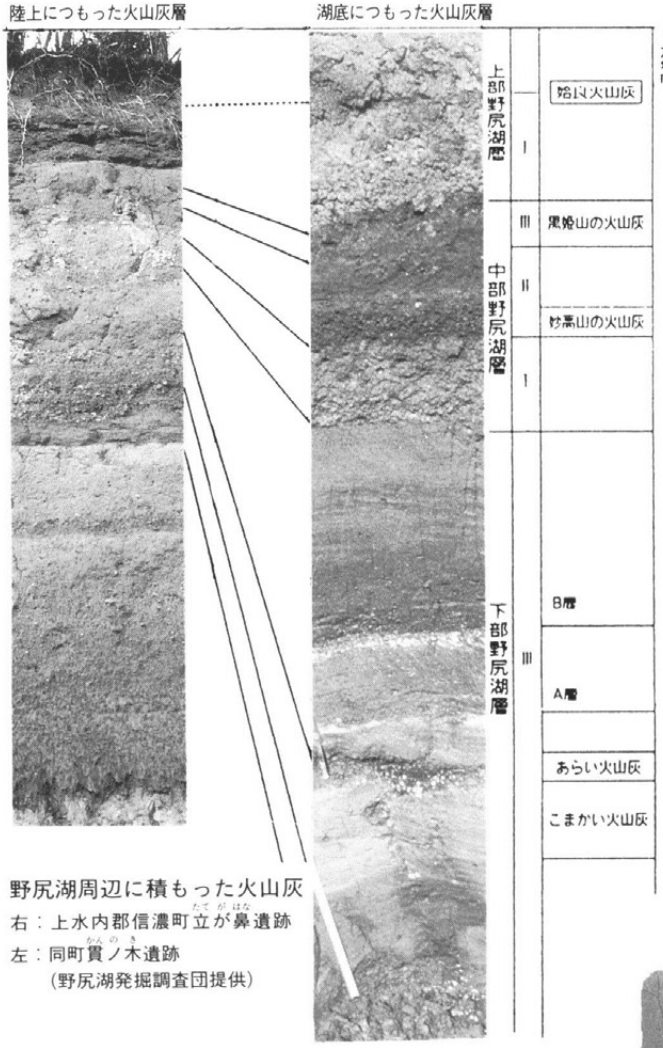
られはじめます。溶岩などの火口からの噴出物は、コップから水があふれるように山すそに向かって流れ出て、なだらかな曲線のすそ野が広がる地形になります。富士山はその代表例です。約五万年前になると、とんがり帽子形の山の一部が、泥やゴツゴツした岩などのなだれによって削られたり、火口周辺が盛り上がり崩れ出します。その活動は、馬のひずめの形に似た大きな火口をつくり出し、八ヶ岳連峰の天狗岳、稲子岳にみることができます。

◇火山灰という「ものさし」

いっぽう、全国にわたる地層の中の火山灰の調査から、先土器時代や縄文時代に南九州の姶良火山（現在の鹿児島湾はこの火山のカルデラ）を源とする火山灰が降り落ち、日本列島全域におよぶ広い範囲に層をつくったことがわかってきました。約二万二〇〇〇年前と、約六〇〇〇年前のことです。

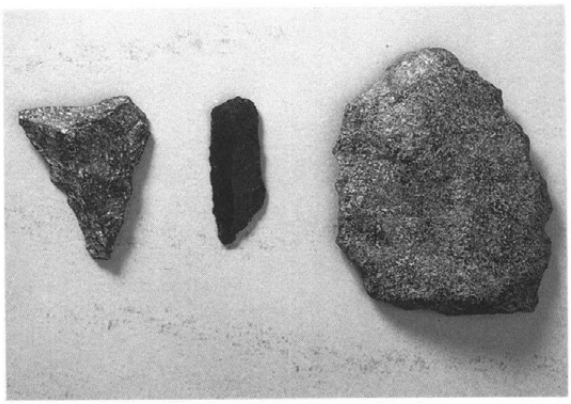
信濃町の野尻湖底にもその二万二〇〇〇年前の姶良火山灰層が、五～一〇センチメートルの厚さでみつかっています。このほか、妙高山や黒姫山の火山灰層もみつかり、当時の火山活動の広さと大きさがわかってきており、昔を知る手がかりとなります。

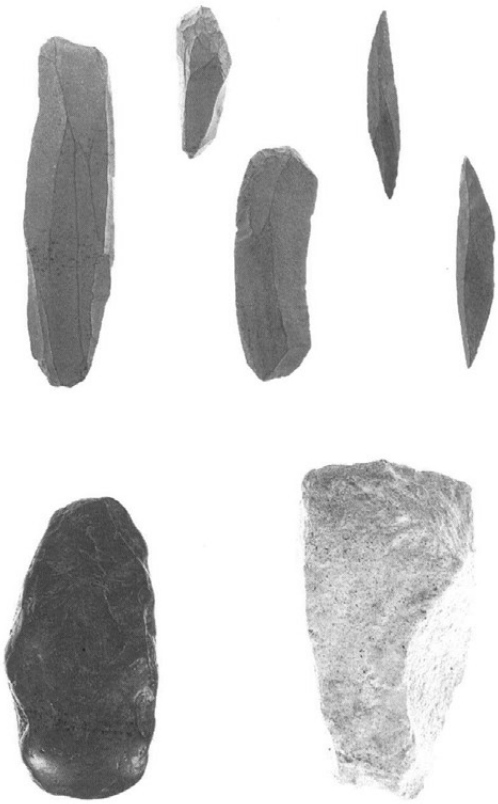
陸上につもった火山灰層　　湖底につもった火山灰層



野尻湖周辺に積もった火山灰
右：上水内郡信濃町立が鼻遺跡
左：同町貫ノ木遺跡
（野尻湖発掘調査団提供）

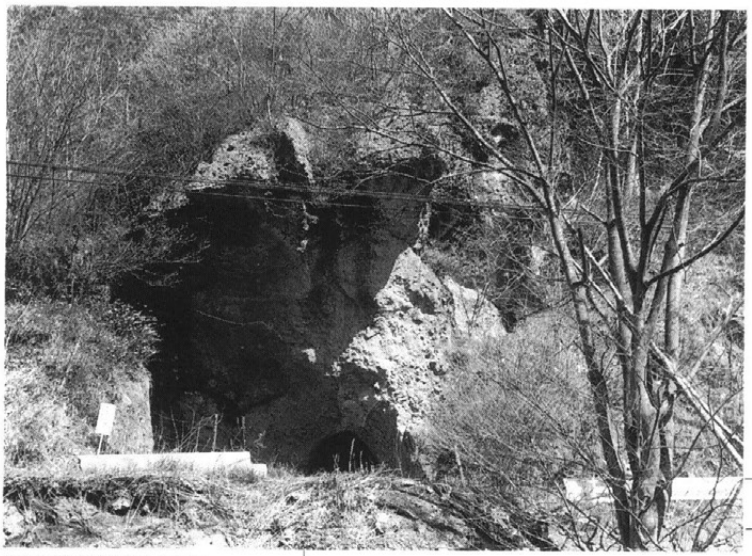
黒姫山・妙高山からの火山灰

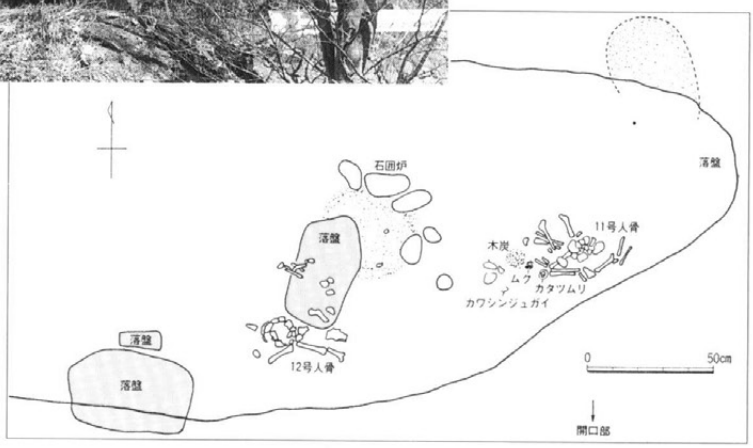




先土器時代の石器　複製　（原資料　信濃町立野尻湖博物館蔵）
上：立が鼻遺跡出土
右：上水内郡信濃町杉久保遺跡出土

地震の跡は遺跡でもみつかるの





栃原岩陰遺跡(上)と落盤死した子供(右)
南佐久郡北相木村
大きな集塊岩が浸食されてできた岩陰で、すぐ下にはイワナがすむ相木川の清流が流れている。
カタツムリなどをたべていたこどもが、突然の地震による落盤で圧死した悲惨なようすが伝わってくる。
(『長野県史考古資料編一の(二)』1982年)

◆地震災害

一九九五年一月におこった阪神・淡路大震災のように、地震は耐震技術の進んだ現代の文明社会にも大きな被害をもたらします。縄文時代や歴史時代でも、もちろん地震にともなう災害は避けられないものでした。

◆遺跡のなかの地震跡

フォッサ・マグナが通る長野県内の遺跡では、いくつかの古い地震の跡が遺跡のなかに残されています。

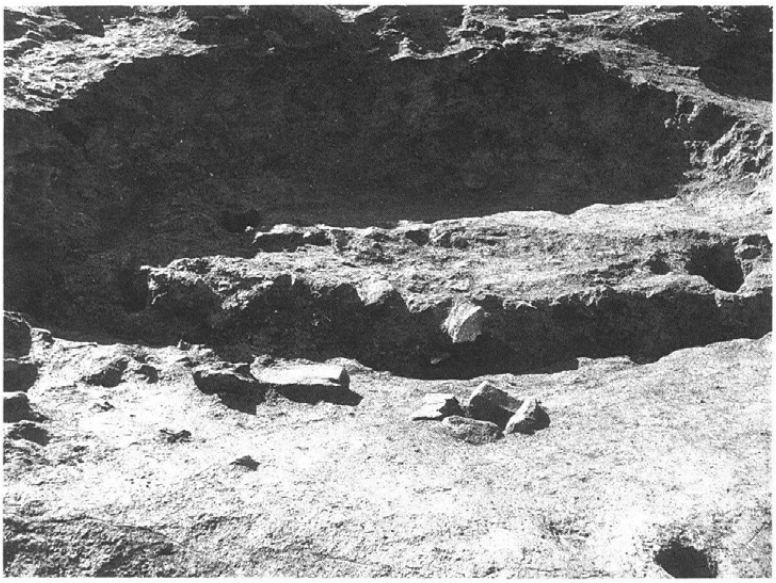
縄文早期の南佐久郡北相木村栃原岩陰遺跡では、地震による落盤によって、圧死した二人の子どもが発掘されています。

岡谷市中島B遺跡でも活断層の跡が発見され、地質学者の調査によって、およそ一万六〇〇〇年前以降、少なくとも五回の断層活動があったことが明らかにされています。

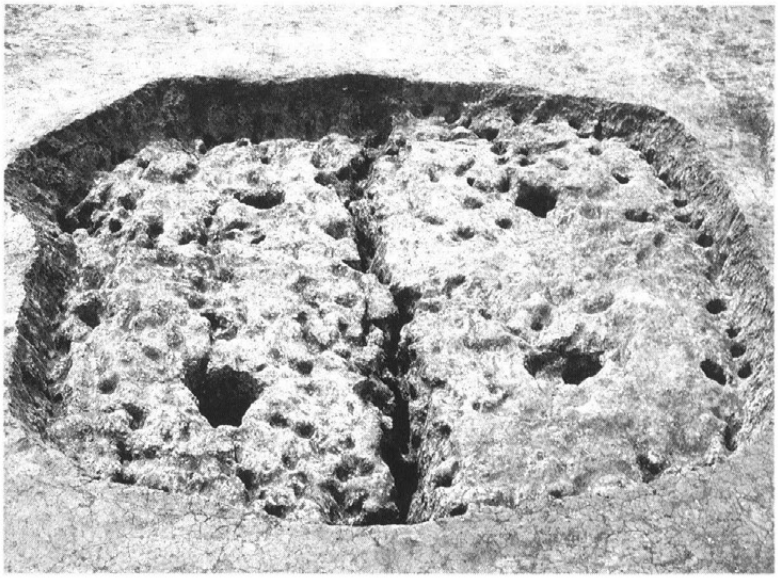
縄文前期の茅野市阿久尻遺跡では、遺跡のなかに地震の大きな地割れがいく筋も走り、なかには高床建物の柱跡を地割れが切った例もみつかりました。

一九七三〜七五年にかけて発掘された諏訪市荒神山

遺跡にしるされた地震のつめ跡

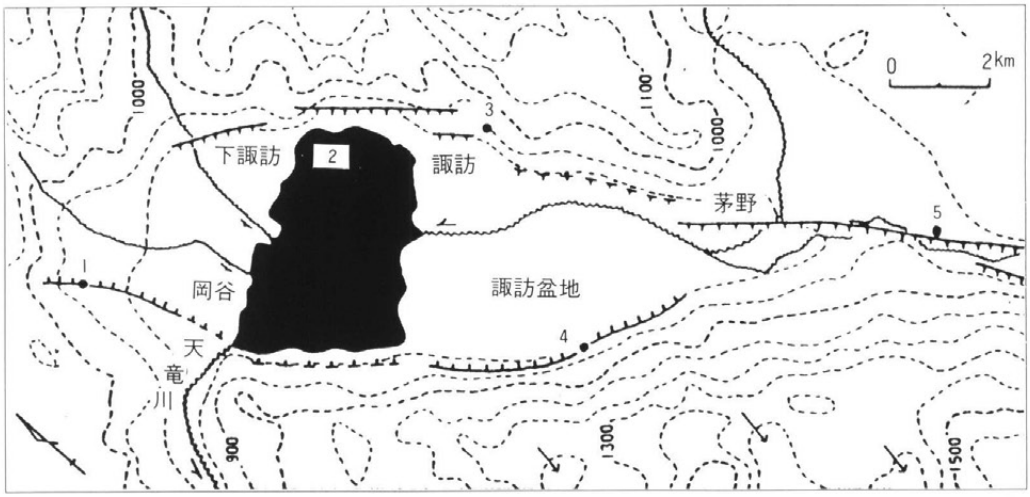


縄文の竪穴住居に残された段差
諏訪市荒神山遺跡
90号住居跡の床面は、地震の断層により10cmの段差が生じた。



阿久尻遺跡の地割れ　茅野市
（茅野市尖石考古館提供）
この遺跡では地震による大きな地割れが何ヶ所かで発生し、なかには高床建物の柱穴を横切るものもみられた。

弥生の竪穴住居に残された地割れ
諏訪市一時坂遺跡　4号住居跡
（諏訪市教育委員会提供）



諏訪湖周辺の活断層と遺跡
（寒川　旭『地震考古学』1992年　中公新書を修正）
1 中島Ａ遺跡　2 曽根遺跡　3 一時坂遺跡　4 荒神山遺跡　5 阿久尻遺跡
フォッサマグナの通る諏訪盆地には、地震の痕跡を残す遺跡が多い。

中島Ａ遺跡の断層調査　岡谷市
最近は地震研究者が直接断層の発掘調査を実施して、古い地震の跡を確認している。

遺跡では、縄文時代中期中ごろの住居跡の床面が断層により切断され、垂直方向で六〇センチメートルも下がっていました。日本の縄文遺跡では初めて確認されたことです。

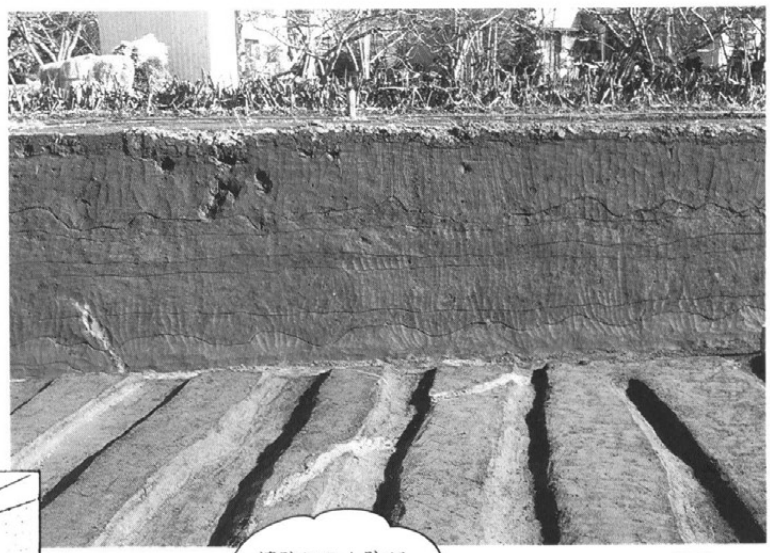
弥生時代でも、諏訪市の一時坂遺跡の住居跡では、床面に一〇センチメートルの段差があり、活断層によって地面が相対的に上昇したことがわかりました。

◆土壌の液状化と噴砂

一九六三年の新潟地震で水分を含んだ砂層が液状化して大きな被害を出しました。それ以来、地震の跡として注目されているのが、液状化した砂がひび割れを通して地上に噴き出る噴砂現象です。

千曲川の自然堤防上にある長野市篠ノ井遺跡では、四・三メートルの深さから上昇した幅四メートルの、古代における液状化現象を物語る噴砂の跡が発見されています。また、対岸の更埴市窪河原遺跡においては、一八四七（弘化四）年の善光寺地震のときに生じた幅四〇センチメートルもある規模の大きな噴砂跡が観察されています。

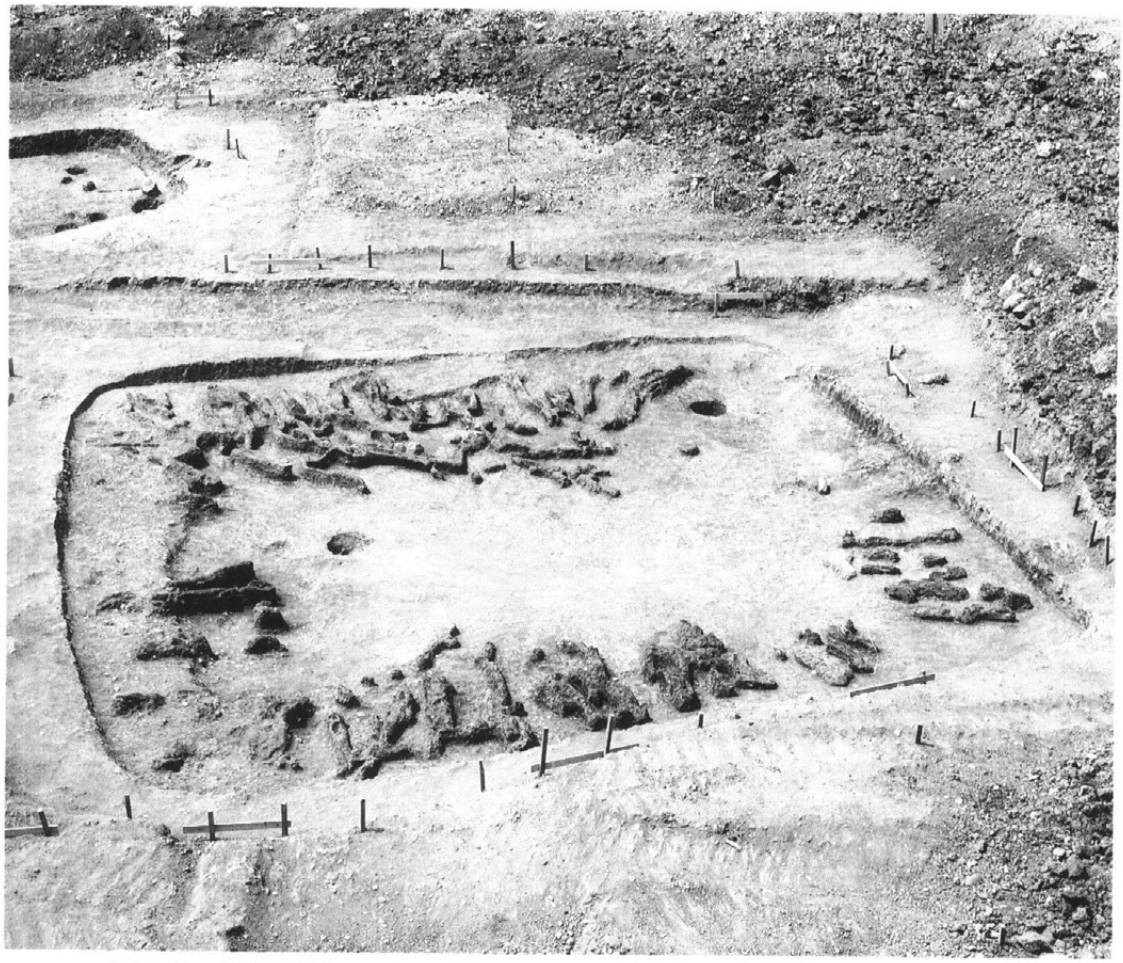
こうした噴砂跡は、その後も長野盆地の自然堤防上の遺跡の発掘で多数発見されており、今後の地震対策に重要な判断材料を提供しています。



窪河原遺跡の噴砂　更埴市（長野県埋蔵文化財センター提供）
遺跡発掘の断面に残された噴砂は、1847（弘化４）年３月24日のマグニチュード7.4の善光寺大地震のすごさを今に伝えている。
（上図　寒川旭『地震考古学』1992年中公新書）

「三月二十四日大地震火災、数万の人々群死苦痛の略図」（真田宝物館蔵）
地震で木造、瓦屋根の家が倒れ、火災から逃げまどう人びとのようすがリアルに描かれている。

火事にあった家の跡もみつかっているの



火事にあった竪穴住居　長野市三輪遺跡（長野市教育委員会提供）

◆発掘された焼失家屋

遺跡の発掘をしていると、ときどき炭化した木が折り重なったかたちで発見される住居跡があります。これは、火事で焼け落ちた家の跡です。日本の家は昔から木や草などの材料を使っていたので、火事になりやすかったといえます。そのうえ、家の中にある炉で煮炊きしていたので、ちょっとした不注意ですぐ火事になってしまったことでしょう。

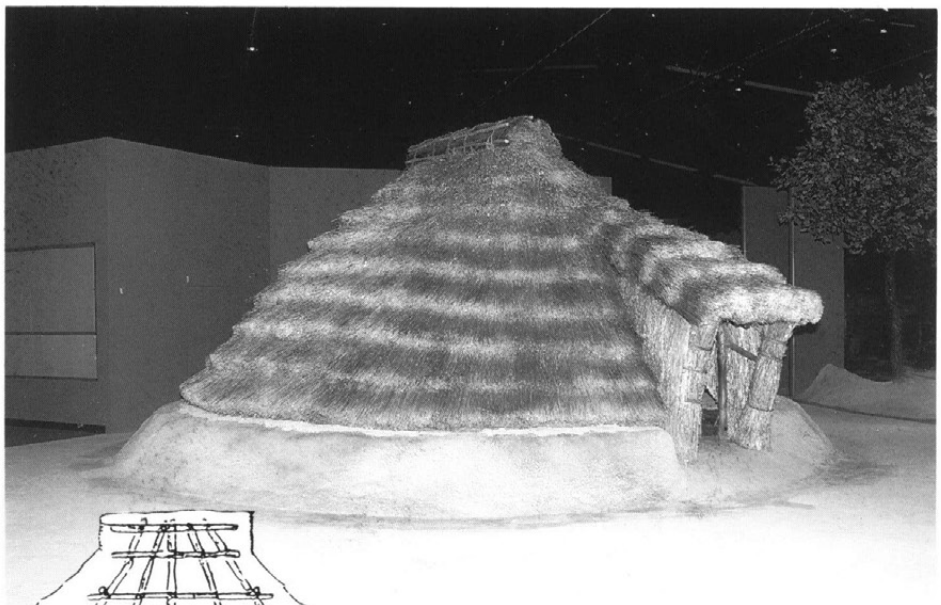
火災になった家は、柱や屋根の材木が焼け残っていたり、土器や石器などの生活用具が使っていた状態のままに置かれていたりするので、当時の生活のようすがよくわかります。

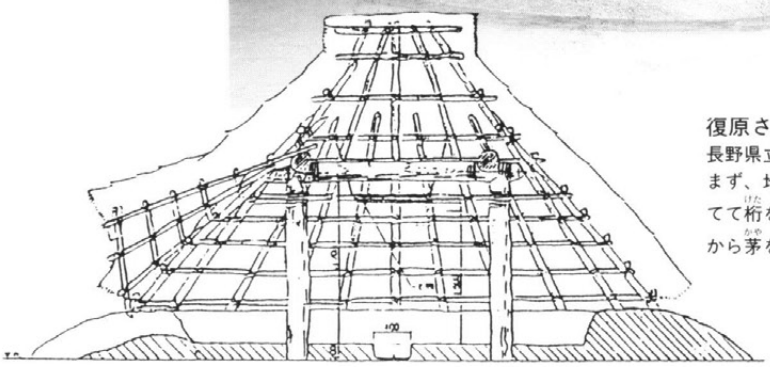
◆復原できる屋根の形

長野市の三輪遺跡で発掘された焼失家屋では、四本の柱のほかに、直径が四〜九センチの丸太が何本も発見されています。これは屋根に渡した垂木で、中央部から放射状に並んで発掘され、よくみると、その中央付近のものは中央部へ向かって直角に交わっています。他の炭化材との位置を考えると、これは入母屋風の屋根

床に焼け落ちた柱や屋根材　長野市三輪遺跡
（長野市教育委員会提供）
不幸にして火事にあった住居から、当時の建物のつくり方や、材料にした木の種類を調べることができる。

火事にあった古墳時代のムラ　松本市山影（やまかげ）遺跡（松本市教育委員会『山影遺跡』1993年を修正）





復原された竪穴住居と住居の構造
長野県立歴史館
まず、地面を40～50cm程度掘ってから、４本の柱を立てて桁を渡す。次に、放射状に垂木を架けて、その上から茅を葺いている。

だろうと推測されています。

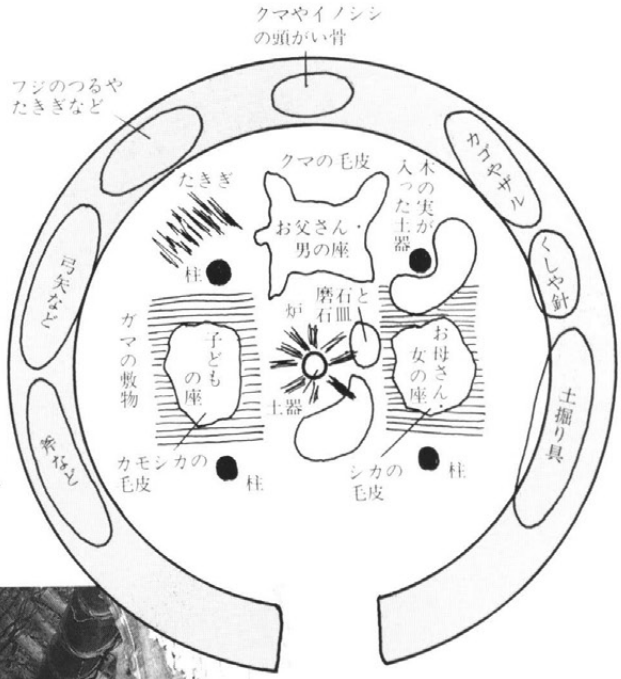
岡谷市橋原遺跡では、厚さ一センチメートル、幅二〇センチメートル、長さ四〇センチメートルほどの板材が、壁の傾斜にそったかたちで何枚かみつかりました。これは壁が崩れないようにした板ではないかと考えられています。

このように竪穴住居の床や壁のようすをみたり、焼け残った建築材をもとに、太さや長さ、その組み合わせを細かに観察して、建物の形を復原していくのです。

◆家の中のようすや道具の使い方

歴史館には、縄文時代の復原住居があります。これは、諏訪郡原村阿久遺跡で発見された三四号住居跡をモデルに、各地の焼失家屋の状況を参考にして建てられています。竪穴住居のまわりの土手は、最近更埴市屋代遺跡で確認されましたし、炉の上にある棚は、諏訪郡富士見町藤内遺跡の住居から発見されています。そのほか、出入り口や床にある炉を目じるしにして、土器、石斧や矢じりなどの道具の位置から、竪穴住居に暮らす人の居場所を推測したりもしています。

上田市林之郷遺跡では、焼失住居跡のかまどの近くに、大量の壺やかめが散乱していました。不慮の事故にあった古墳時代のようすがよくわかります。



竪穴住居内の住みわけ
竪穴住居跡に残された遺物を手がかりにして、そこに暮らした家族の誰がどこをおもに使ったかを探ってみた。歴史館の竪穴住居では、入り口正面がお父さん、右はお母さん、左は子どもが座っていたと想定している。

復原された竪穴住居の内部
長野県立歴史館

かまどの近くに散乱する土器
上田市林之郷遺跡（上田市教育委員会提供）

洪水に埋まった遺跡はあるの

発掘調査された屋代田んぼ　更埴市更埴条里遺跡（長野県埋蔵文化財センター提供）

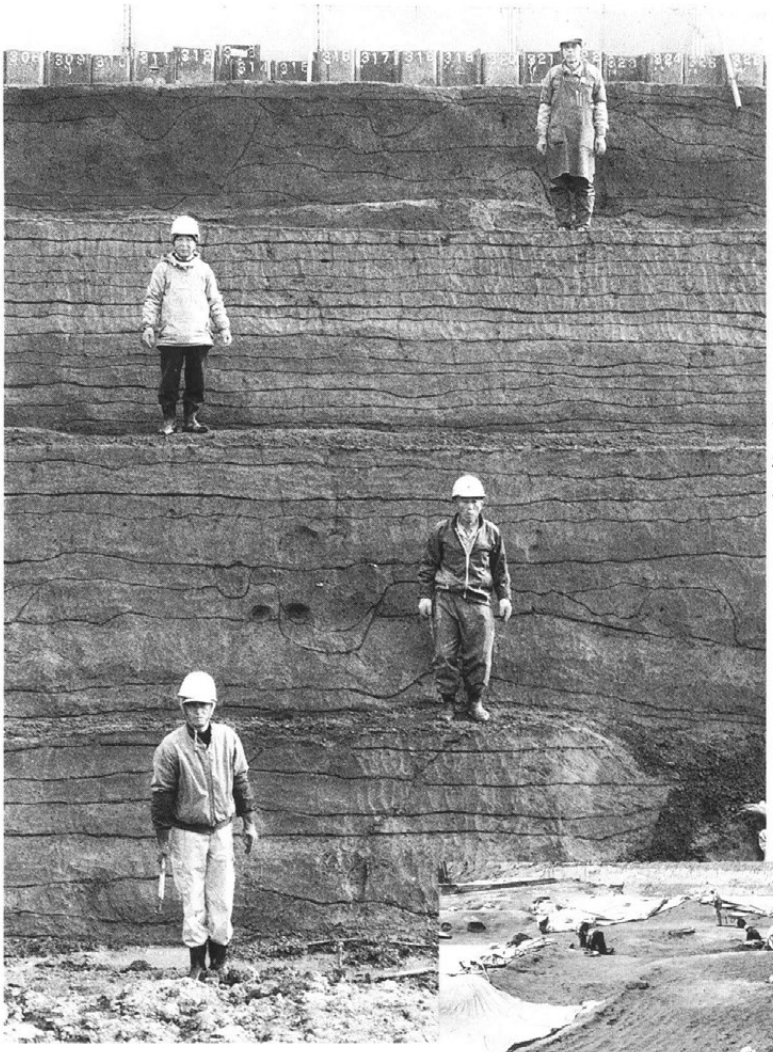
◆遺跡の上を通過する高速道

上信越自動車道は、更埴市森将軍塚古墳のふもとに広がる水田地帯を条里の南北軸に平行に走り、千曲川を越えてきた長野自動車道といっしょになり、千曲川の右岸を北へ進みます。この高速道路は、縄文・弥生・古墳・平安時代の遺跡の上を通過しています。

◆自然堤防の上にできた屋代遺跡群のムラ

この周辺一帯は、屋代の住宅街・工場・畑がつづいていますが、ここは千曲川のたびかさなる洪水によってできた小高い場所で、自然堤防といいます。

自然堤防の断面を見てみましょう。シマもようになっているのは洪水が運んできた土や砂がたまってできた土の層で、一番下の層、つまりもっとも古い層は今から五〇〇〇年ほど前の縄文時代の人びとが暮らしていた地面です。そのころの土器は、現在の地面から六㍍も下から出ました。その少し上には、縄文時代中期後半の土の層がありました。今から四〇〇〇年前のムラがここから発見されました。広場を囲むように住居がつくられていたようです。竪穴を掘りあげた土を



更埴市屋代遺跡群の土層の重なり
（長野県埋蔵文化財センター提供）
砂や泥、植物がくさって黒くなった土の層がなん枚も重なっている。人の大きさとくらべると、その厚さがよくわかる。

平安時代の水田の発掘調査

縄文時代のムラの発掘調査
（長野県埋蔵文化財センター提供）
現在の地面から、平安時代のムラの地面までの深さは約0.7m、縄文時代までは約4mある。これだけの土砂を運んだのは千曲川だ。

平安時代の水田
長野市石川条里遺跡（長野県埋蔵文化財センター提供）

水田に残された人の足跡
ひたひたと押し寄せる泥水が水田を覆いつくした。泥を取り除くと、当時の人びとの足跡があらわれた。

まわりに積んだ周堤（しゅうてい）もみつかりました。さらにその上から弥生、古墳、奈良・平安の各時代のムラの跡が発掘されました。

たびかさなる洪水は、ムラや田畑を砂の下に埋めました。しかし、人びとは負けずにまた新しいムラを自然堤防の上に築き、砂に埋まった水田を掘り起こし、水路を開いて、水田として利用してきました。

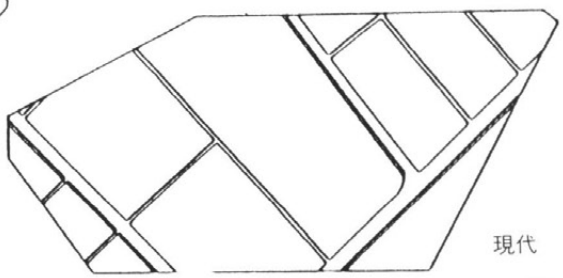
◆洪水で埋まった平安時代の水田跡

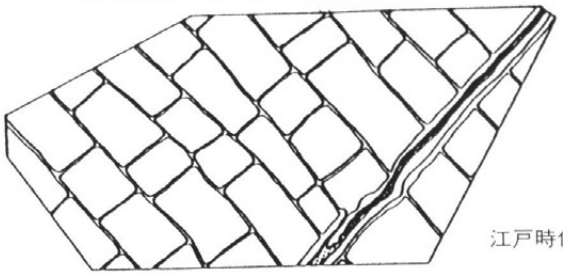
なかでも注目されたのは、更埴市屋代の条里水田地帯の下から、厚い砂に埋もれた平安時代の水田跡がみつかったことです。その砂は八八八（仁和（にんな）四）年に千曲川水系でおきた大洪水によるものだといわれます。

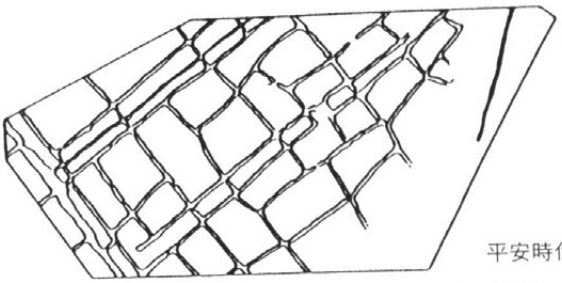
厚く積もった砂の下から幅一メートルくらいの大きなあぜやそのあいだを区切る幅三〇センチメートルくらいの細いあぜが発掘されました。大きなあぜで囲まれた一〇九メートル四方の「坪」とよばれる区画内は、さらに細いあぜで一〇等分され、長地型（ながちがた）とよばれる水田区画となっていることがわかりました。

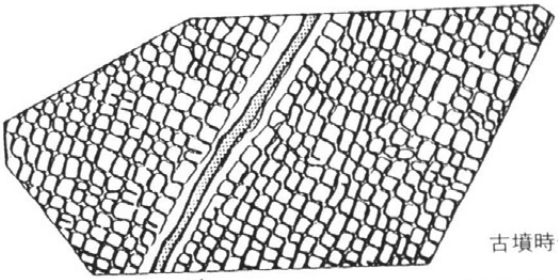
長野市川田条里遺跡でも、洪水で埋まった水田跡が発掘され、弥生時代から現代までの水田の区切り方がわかりました。

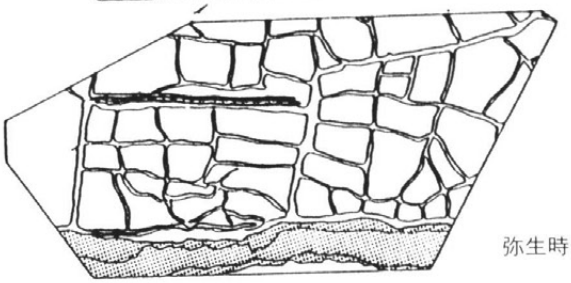
水田のうつり変わり
長野市川田条里遺跡（長野県埋蔵文化財センター提供）

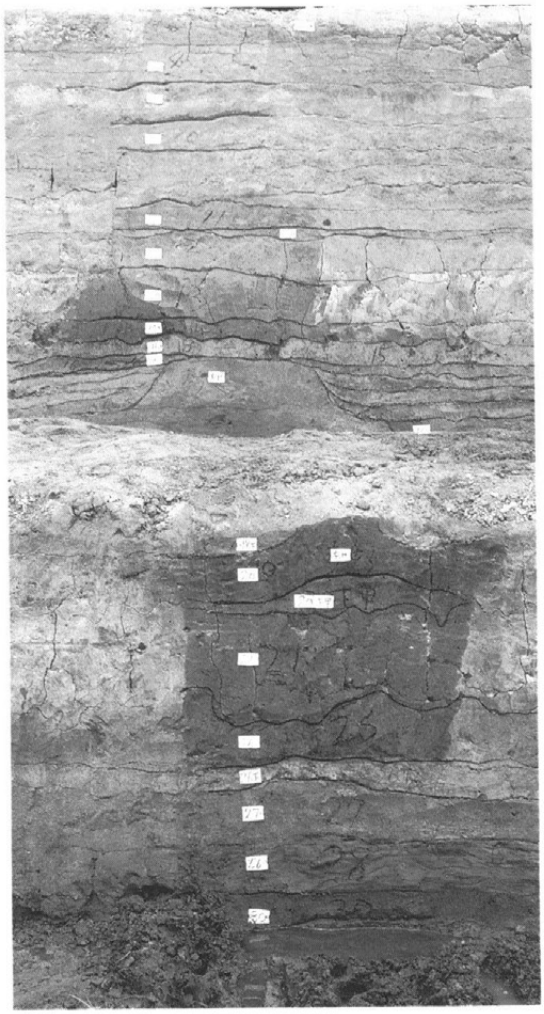












土層の重なり　長野市川田条里遺跡
（長野県埋蔵文化財センター提供）
たび重なる洪水で、繰り返し水田は埋ったが、同じ場所にまた新しい水田がつくり直された。

浅間山の噴火と県遺跡

◆噴火の記録と年代の目じるし

浅間山は、長野・群馬県境にそびえる、標高二五六八㍍の活火山です。その噴火は、六八五年以降、現在まで断続的に起きています。ことに一一八〇年前後（平安時代末期）、一六〇〇年前後（安土桃山時代末～江戸時代初め）や一八〇〇年前後、幕末から一九六〇年代は、ひんぱんに噴火し、江戸時代の一七八三（天明三）年には、死者千人以上を出す被害をもたらしています。

火山の噴火にともなって大気中に噴き上げられた火山灰、火山砂、軽石など（ギリシャ語で「テフラ」といいます）は、地上に降り落ちます。風や気流の影響を受けると、より広範囲に運ばれることになります。もしも噴火の年代やその時のテフラの特徴がわかっていれば、地上に降り落ち、長い年月のあいだに層をつくった地層の断面の調査から、逆に地層の年代がわかります。地層の年代がわかれば、この地層から発掘された石器・土器・金属器や遺構などの年代が判断でき、その遺跡のようすがみえてきます。

◆県遺跡が問いかけること

一九九三（平成五）年、北佐久郡軽井沢町の県遺跡を長野県埋蔵文化財センターが発掘調査しました。それまでの調査で、二軒の竪穴住居跡と一層のテフラ層が確認されていました。今回の調査で、新たに住居跡一軒と土師器がみつかり、得られた情報を合わせてみると、この遺跡が古墳時代前期はじめの小さな集落だったことがわかりました。

さらに、住居跡を覆っていた地層の中のテフラを分析した結果、平安時代、一一〇八（天仁元）年の浅間山噴火の時のものと同じであることがわかりました。このことは、どう考えたらいいのでしょうか。

古墳時代前期はじめごろ、人の住んでいた家がなんらかの理由で使われなくなり、やがて建物がなくなります。その跡（竪穴）だけが凹んだまま残され、およそ七五〇年後の一二世紀はじめのころに埋まったのでしょうか。

竪穴住居跡に積もった浅間山の火山灰　（長野県埋蔵文化財センター提供）

テーマ3

戦争

カブトとヨロイ　複製（原資料　右：飯田市開善寺蔵　左：県宝　飯田市教育委員会蔵）

はじめて戦争をした人びと

湾岸戦争　戦車の向こうで燃える油田（毎日新聞社提供）

◆戦争のきっかけ

人類の歴史には、平和なときばかりでなく、残念ながら戦争のあった時代が繰り返されています。

戦争がひき起こされるきっかけは、それぞれの時代や地域によって異なっています。たとえば、第二次世界大戦は一九三〇年代の世界的な大不況が引き金になりました。また一九九〇年代の旧ユーゴスラビアの内戦は、複雑な民族問題や宗教問題がからんでいます。

◆農耕社会と戦争

狩猟採集生活を離れ、農耕を始めた人間が一番熱心につくりはじめた食料は穀物です。穀物は、ある程度保存しておくことができるため、たくわえができます。たくわえられた穀物は、お金のかわりをつとめることになります。生活に必要な衣類やよその国の珍しい物品も、穀物と代替えで手に入れるようになりました。

人びとは便利で快適な生活を求めて、穀物をより多く確保しようと、土地や水を求めるようになります。そこで、土地争い、水争いが始まりました。狩猟採集生活をしていた時代にはなかった争いの原因です。

上：見張り台が立つ弥生ムラ　佐賀県神埼町・三田川町吉野ケ里遺跡（佐賀県教育委員会提供）
右：大量の銅剣を埋めた遺跡　島根県斐川町荒神谷遺跡（島根県教育委員会提供）

やがて、人と人あるいはムラとムラとのあいだに、貧富の差や支配・従属といった新たな社会関係が生まれました。豊かなムラムラは貧しいムラを従えながら手を組んで、より大きな集団（クニ）を形づくっていきます。クニはより強力な支配力をもつために、よそのクニを従えたり同盟関係を結んでいきます。

このように、世界の国ぐにの歴史をみても、人の集団と集団がぶつかりあって殺しあうという事例は、おおむね農耕社会が始まってからのことです。

◆倭国の大乱

中国の歴史書の『後漢書』（二五～二二〇年の記録）に「倭国大いに乱る」とあり、『魏志』倭人伝（二二〇～二六五年の記録）にも「倭国乱る」と記されています。考古学の上でも高地につくった集落や濠で囲まれた集落の跡が弥生時代の遺跡に登場します。また、この時代の墓地から戦闘に使われた矢じりが体にささった遺体がみつかっています。これらのことから、弥生時代の社会のようすがうかがえます。

わたしたちの暮らす日本でも、稲作と金属器の使用がもたらされた弥生時代になって、はじめて戦争をおこなうようになったと考えられています。

弓矢や槍は戦いの道具じゃないの

黒曜石でできた槍先　右長さ17.6cm
小県郡和田村男女倉遺跡（和田村教育委員会蔵）

長さが21cmもあるみごとな槍先
上伊那郡南箕輪村神子柴遺跡　複製
（原資料重要文化財　林茂樹氏蔵　上伊那郷土館保管）
槍の先につけられた石器は、槍先型尖頭器とよばれる。黒曜石やチャートなどの、硬くて、割れ口の鋭利な石でつくられた。

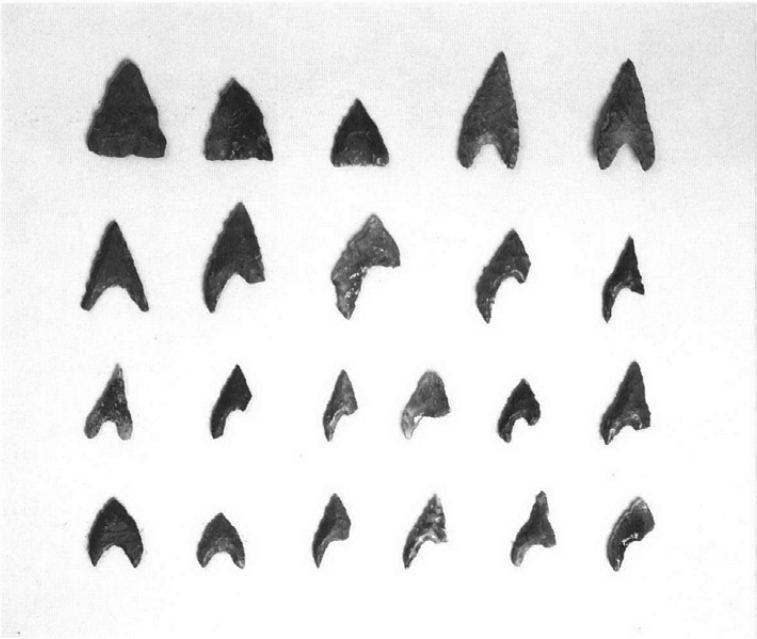
◆槍の出現とその用途

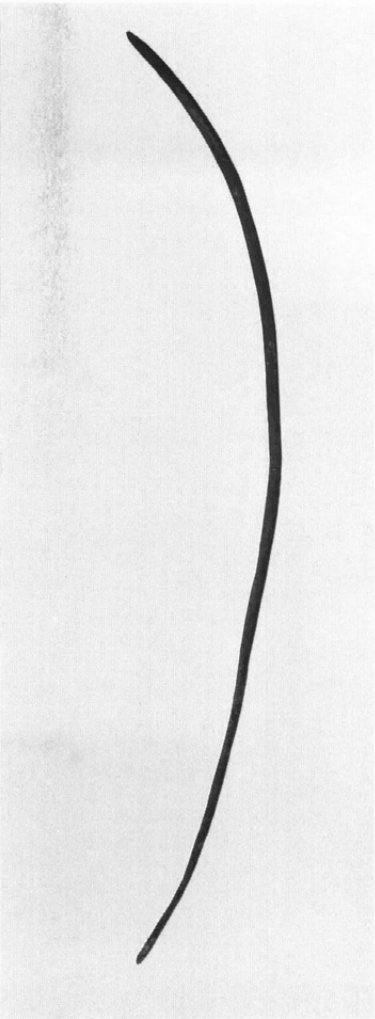
映画などで戦国時代の争いのシーンをみると、槍や弓矢を使って戦っていますが、このような道具は最初から戦争の武器として発明されたのでしょうか。

そうではありません。槍は、今から約三〜四万年前に発明されたのですが、当時はまだナウマンゾウやオオツノシカなどの大型動物が日本にもいて、これを狩る道具が必要だったのです。野尻湖周辺や、黒曜石の産地の近くにある和田村の男女倉遺跡に住んだ人びとは、大きくて精巧な槍を石や骨でつくり、これで獲物を狩っていました。当時は人を殺しあう争いなどなく、協力しあって生きるために、動物を狩る道具として槍が生みだされたのです。

◆弓矢の発明と使い方

弓矢はどうでしょう。縄文時代になると気候が温暖化し、日本は大陸から離れた列島となり、クマ・イノシシ・シカ・ウサギなどの動物が狩猟の対象になってきます。これらの動物は動きが機敏なのでそれに対応する道具が必要になりました。そこで登場したのが弓矢です。

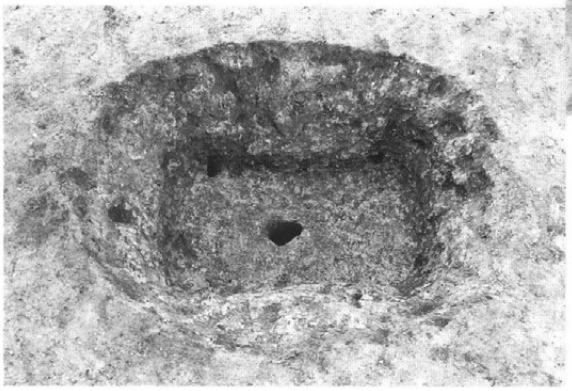


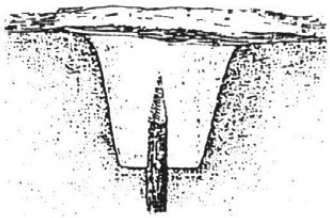


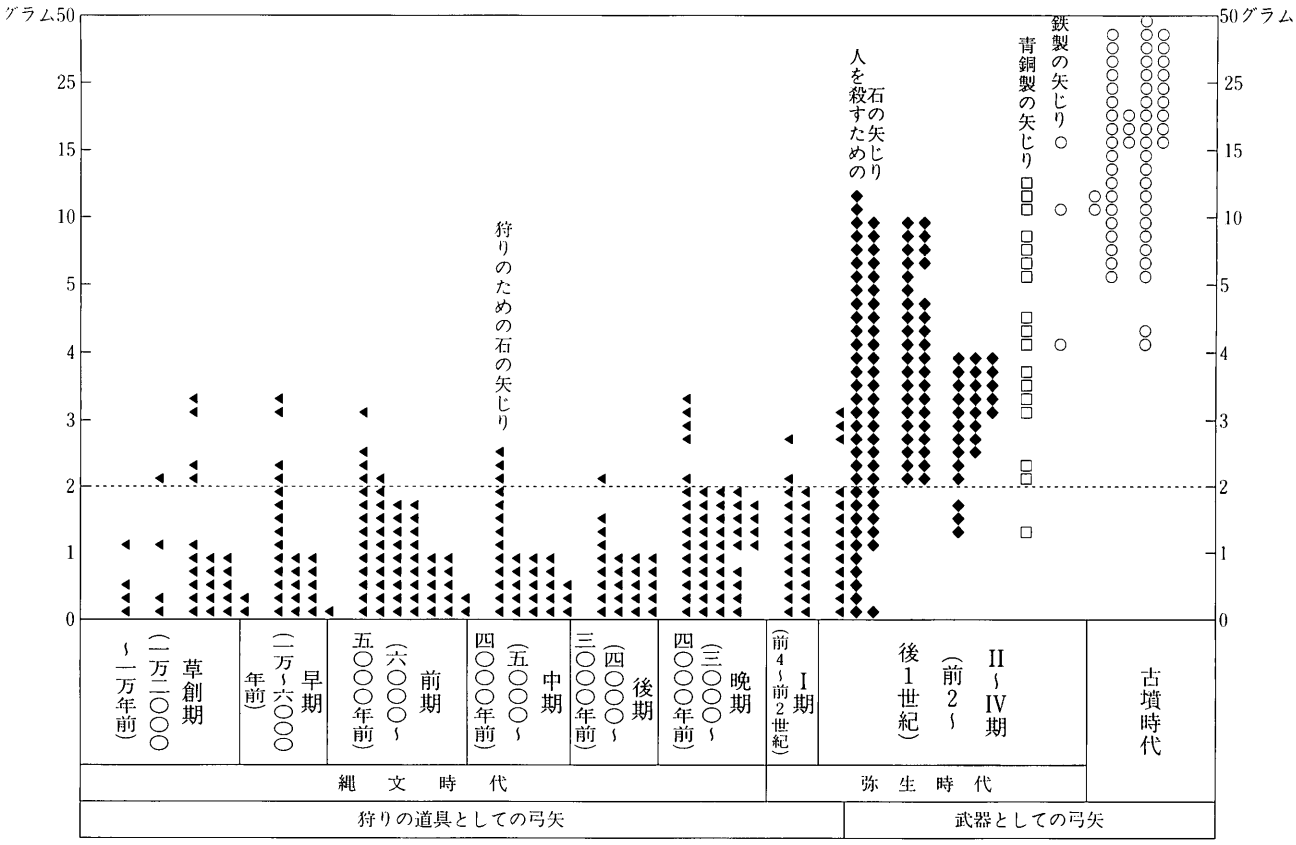
上：矢の先につけられた矢じり　諏訪市曽根遺跡（宮坂光昭氏蔵）
右：弓　長さ120cm　福井県三方町鳥浜貝塚（福井県立若狭歴史民俗資料館蔵）
矢の先につけた矢じり（石鏃）は、3cm、2g以下と小さいが、その威力は鉄にも劣らず、遠くの獲物を射止めた。

狩猟の絵が描かれた石
茅野市尖石遺跡　複製
（原資料　茅野市尖石考古館蔵）

茅野市稗田頭（ひえだがしら）B遺跡の落とし穴群
（茅野市尖石考古館提供）
台地のへりに沿って多くの落とし穴がつくられた。大人がスッポリと入るほどの大きさで、底には逆茂木（さかもぎ）まである。







矢じりの大きさの変化
（佐原真「遺跡が語る日本人のくらし」1994年　岩波書店を修正）

弓矢は、飛び道具といわれるように、遠くから正確に獲物を射止めることができ、狩猟の効率を飛躍的に高めました。遠くからですから狩人（かりうど）の身も安全です。なお、落とし穴をつくり、そこに追いこんで獲物を捕らえるということもするようになりました。

このように弓矢もあくまで狩りの道具であって、縄文時代は戦争のない時代でした。

◇狩猟具から武器へ

それでは、槍や弓矢はいつごろから武器として使われるようになったのでしょうか。弥生（やよい）時代になってから、という説が有力になっています。

矢の先には石でつくった矢じりをつけますが、縄文時代と弥生時代のものを比べると、とても興味深いデーターがあります。縄文時代に比べて、弥生時代の矢じりのほうが菱形（ひしがた）で大きく重いものが多くなるのです。これはよろいなどを打ち抜いて人を殺し傷つけるために大型化し、武器へ変わった結果だと考えられています。生活のための道具が、殺人の道具に変わってしまうのです。文明の進歩とはいったい何かを考えさせる事実ですね。

戦争はいつごろ始まったの

防御をかためた弥生ムラ
愛知県清洲町朝日遺跡（愛知県埋蔵文化財センター提供）

復原された高床倉庫
静岡県静岡市登呂遺跡（静岡市立登呂遺跡博物館提供）

◆土地と水などをめぐる争い

今から約二三〇〇年前、わが国にも大陸から稲作が伝わりました。人びとは米（籾）を財産として大切に、たくわえました。また、条件のよりよい耕地や水を確保しようと努力しました。

こうして、財産や耕地・用水をめぐってムラのあいだに格差が生れ、争いがおこるもとになりました。

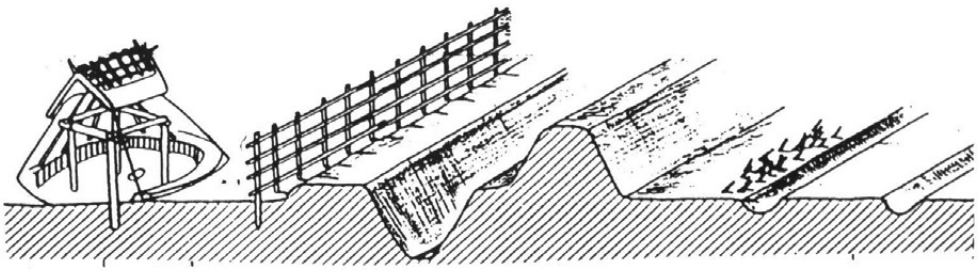
◆守りのムラ

弥生時代中期になると、各地でムラを守るため濠をめぐらすようになりました。愛知県清洲町の朝日遺跡では、濠の内側に土塁が築かれ、外側には鋭くとがった杭先が周囲に向けて立てられました。こうしたムラを環濠集落といいます。また神奈川県横浜市の大塚遺跡のように、丘の上や山頂にもムラ（高地性集落）が営まれます。これも防御を優先的に考えたものです。

長野県でも、長野市の松原遺跡や塩尻市の上木戸遺跡などで環濠集落が発見されています。どうやら、稲作を始めた弥生時代は、紛争や戦闘が多く発生し、平和で牧歌的な世の中とはいえなかったようです。

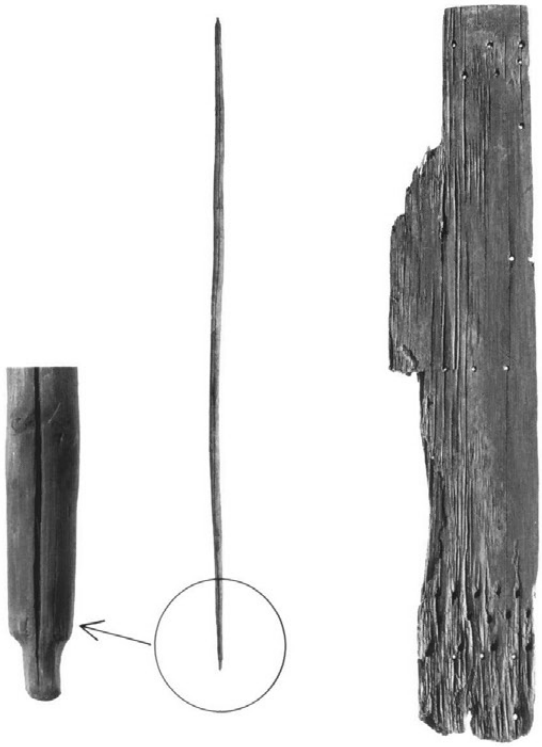
高台につくられた弥生ムラ
神奈川県横浜市大塚遺跡
（横浜市ふるさと歴史財団提供）

濠がめぐる弥生ムラ
長野市松原遺跡
（長野県埋蔵文化財センター提供）

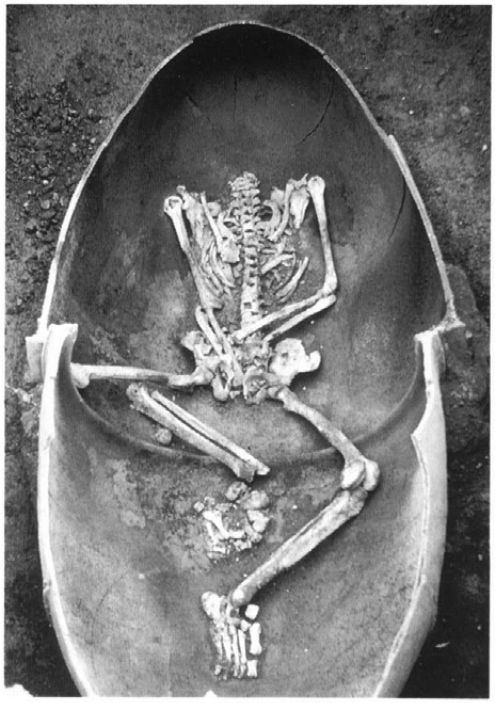


環濠防御モデル　長野市松原遺跡
（長野県埋蔵文化財センター『いま信濃の歴史はよみがえる』1991年）

松原遺跡の石剣（せつけん）（右）と石戈（せつか）　石剣の長さ12.4cm
（長野県埋蔵文化財センター提供）



弓と盾　長野市川田条里遺跡　弓の長さ166cm
（長野県埋蔵文化財センター提供）



首のない人骨　佐賀県神埼町・三田川町吉野ケ里遺跡
（佐賀県教育委員会提供）
土器でできたひつぎにほうむられたこの人には、首がない。戦闘の末に、切り落とされてしまったのだろうか。

◆武器の登場

佐賀県神埼町と三田川町にまたがる吉野ケ里遺跡では、鉄製の剣が折れて刺さったり、首を失ったりした人骨が発見されています。じつは松原遺跡でも、胸のあたりに矢じりのある人骨がみつかりました。これらはおそらく、ムラとムラとの争いに参加した兵士の墓だろうと考えられています。

剣や矢じりのほかにも、鉾や戈など殺傷能力の高い武器がつくられるようになりました。武器の素材も石のほか、鉄、木、骨などさまざまです。長野市の石川条里遺跡からは、木製の盾も出土しています。

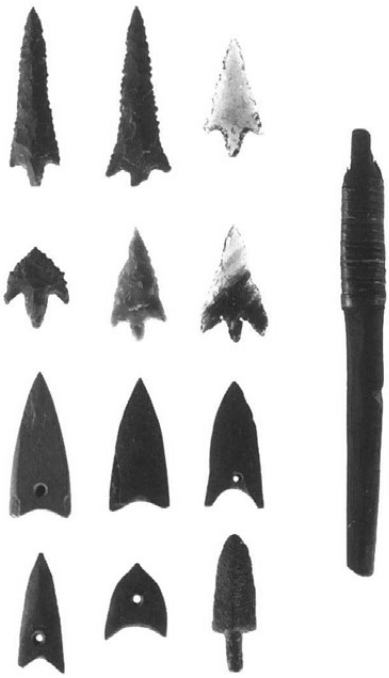
武器が多量につくられるようになると、戦勝祈願などの新たな祭りがおこなわれるようになります。剣や戈などの形になぞらえた青銅製の祭りの道具が、儀式などに使われました。本県にも、長野市の松節遺跡の銅鉾や北安曇郡小谷村出土と伝えられる銅戈があります。

戦いの時の集団のリーダーや祭りをつかさどる人は、豊富な副葬品とともに、ムラの一画にある区画溝を巡らせた特別な墓にほうむられます。やがて、彼らはムラムラの有力者に成長して、巨大な古墳にほうむられる時代がやってきます。

弥生時代の武器と武器形祭器

銅戈（どうか）　伝北安曇郡小谷村出土
長さ24.4cm　複製
（原資料　大町市海ノ口上諏訪社蔵）
下にでっぱった長方形の部分を、柄の側面に差しこんで、2つの穴を通したひもでくくりつけた。柄と刃の向きは直交する。相手を引っかけ倒す武器である。

鉄鉾（てつほこ）　上田市上田原遺跡　長さ22.5cm
（上田市教育委員会提供）
下の筒状の茎（なかご）に長い柄を差しこんで使った。相手を突きさす武器である。やがて下の写真のような非実用的な武器に変化する。



さまざまな矢じりと槍の柄
長野市松原遺跡ほか
（長野県埋蔵文化財センター提供）
上二段は打製の矢じり（石鏃（せきぞく））、下二段は磨製石鏃、最下段右は銅鏃

銅剣　埴科郡戸倉町若宮箭塚（わかみややづか）遺跡　長さ13.5cm　複製（原資料　佐良志奈神社蔵）
下にでっぱった長方形の部分を、柄の先につけ、2つの穴を通したひもでくくりつけた。相手を突きさす武器である。

銅鉾（どうほこ）　長野市松節（まつぶせ）遺跡　長さ20.2cm
複製（原資料　小島貞雄氏蔵）
刃の幅が広くなり、するどさを失った武器形の祭りの道具。祭りのときは、集団のシンボルとして使われたのだろう。

森将軍塚古墳にほうむられた人は将軍だったの

歴史館の裏山にある森将軍塚古墳　国史跡　更埴市屋代

◆森将軍塚古墳のほかに将軍塚はありますか

「森将軍というのは、いつごろのかたですか」と、歴史館にみえたお年寄りに質問されました。平安時代の初めに信濃を通って東北地方へ攻めていった征夷大将軍坂上田村麻呂を連想され、「森」も「坂上」と同じように将軍の名字だと思ったのだそうです。

歴史館は、長野盆地南部のほぼ中央を流れる千曲川の東にあります。この地域には、森将軍塚、有明山将軍塚、倉科将軍塚、土口将軍塚と「将軍」がつく古墳が四基あります。また、千曲川の西にも川柳将軍塚と越将軍塚があります。じつは、将軍塚の上につく森、川柳などは名字ではなく地名なのです。

◆将軍塚という呼び名はいつから

長野県内にある古墳で、将軍塚という名前が最初に使われたのは、江戸時代末の一九世紀はじめごろでした。穂刈吉右衛門が「万伝覚書帳」という書物で石川村の「しょうぐんづか」を紹介しています。これがのちの川柳（石川村とニッ柳村が合併）将軍塚です。ほかの古墳にも「将軍塚」がつくのは一八八二（明治一

川柳将軍塚古墳　長野市川柳　県史跡　全長93mの前方後円墳

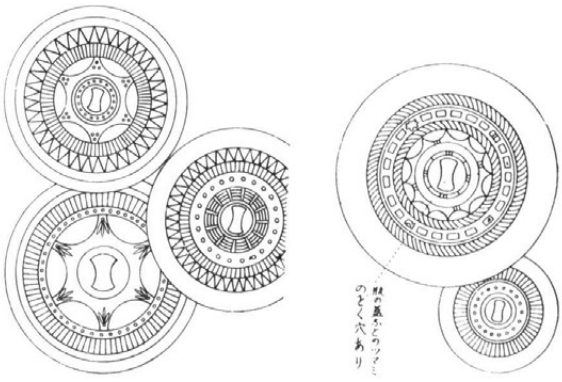
長野盆地南部の古墳時代のおもな遺跡

（更埴市教育委員会『森将軍塚古墳発掘調査報告書』1993を修正）

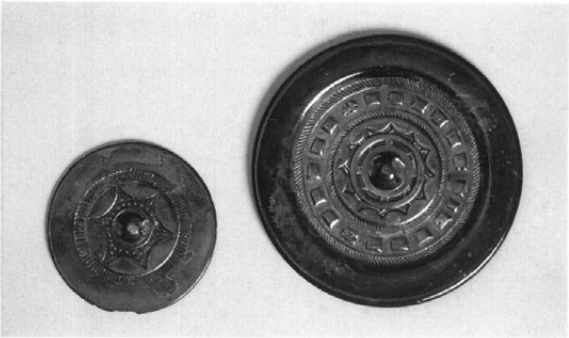
千曲川の両側には古墳時代のムラが帯状に連なり、それを見下ろす周囲の山の尾根上に古墳が点在している。

1　森将軍塚古墳　2　有明山将軍塚古墳　3　倉科将軍塚古墳
4　土口将軍塚古墳　5　川柳将軍塚古墳　6　中郷古墳
7　越将軍塚古墳
A　屋代・埴生遺跡群　B　屋代・雨宮遺跡群　C　篠ノ井遺跡群
D　塩崎遺跡群

土口将軍塚古墳の石室　更埴市土口　全長66mの前方後円墳（長野市・更埴市教育委員会提供）



川柳将軍塚古墳出土資料にかかわる
江戸時代の記録
（鎌倉桐山『朝陽館漫筆』巻之十二1810年）



川柳将軍塚古墳から出土した鏡と装身具類　複製（原資料県宝　布制神社蔵）

五）年ごろ書かれた村誌（『長野県町村誌』）からで、それ以前はどのようによばれていたのか記録がなくてわかりません。

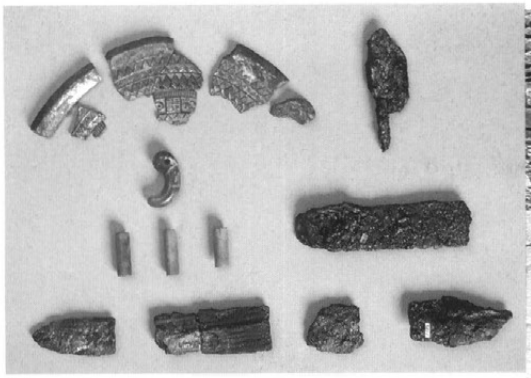
江戸時代には、古墳から出土する勾玉（まがたま）や銅鏡（どうきょう）などを集めたり、研究したりする人が出てきました。墳丘（ふんきゅう）の大きな古墳でしたから、村人たちは、遠い昔、兵士を連れて都からきた将軍をほうむった墓であろうと想像して「将軍塚」とよんだようです。

ちなみに森将軍塚古墳は、屋代村の将軍塚とよばれていた時期があります。現在の名称が定着したのは一九七八（昭和五三）年のことです。

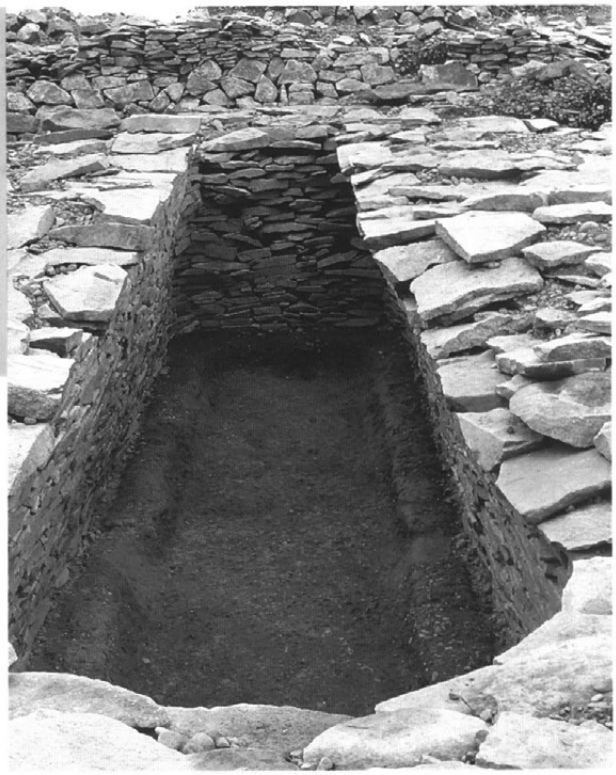
◆将軍塚にほうむられた人びと

長野盆地南部の将軍塚は四、五世紀代の古墳です。ほうむられた人は、おそらく自分が死ぬ前に、支配した土地を見渡せるような高い山の上に古墳をつくらせたことでしょう。ことに森将軍塚古墳のあるじは、四世紀ごろこの地域のムラムラを治めた有力な人でした。また三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）を分けてもらえるほど、大和（やまと）政権と深いつながりをもっていました。

かれの後継者が、土口、倉科、有明山の古墳にほうむられたと考えられています。



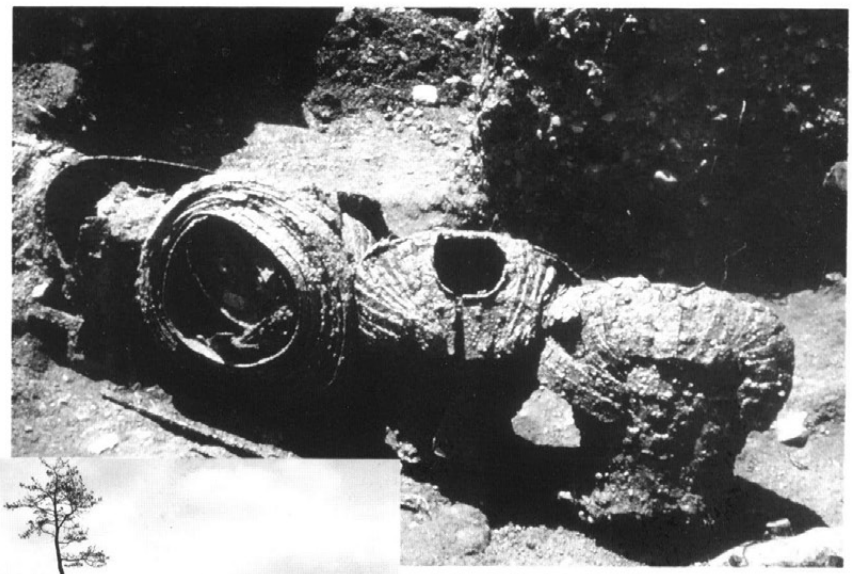
石室から出土した遺物　右上から鉄の矢じり、三角縁神獣鏡の破片、鎌、勾玉、刀の破片
（更埴市教育委員会蔵）



森将軍塚古墳の１号石室　更埴市　長さ7.66m
（更埴市教育委員会提供）
平らな石を積んだ石室の床にひつぎを安置した。石室の内部は赤く塗られている。大きさは東日本最大級である。

左：森２号古墳　更埴市
全長約20mの円墳
下：同古墳出土遺物
（更埴市教育委員会蔵）
右から素焼きの高坏　高さ11.5cm
硬い焼きの注ぎビン（はそう）高さ9.7cm
硬い焼きの高坏　高さ12.2cm

よろいを着た古墳時代の人たちは いつも戦っていたの



よろいが出土したようす
大阪府藤井寺市野中古墳

野中古墳の全景　一辺28m高さ4mの方墳
（大阪大学考古学研究室・北野耕平氏提供）

◆古墳時代のよろいとかぶと

長野県では五世紀のなかば以降の古墳から、剣道の胴のようなよろいが出土します。中野市七瀬双子塚古墳から出土したよろいは、長方形の鉄板を革紐でつなぎ合わせています。飯田市鎧塚古墳出土のものは鋲でつなぎとめてあります。いずれにしても新しい技術を駆使した武具です。

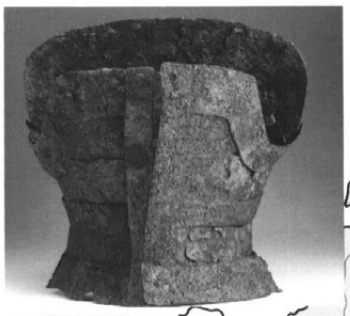
一方、頭をまもるかぶとには船の舳先の形をした衝角付冑と野球帽のような眉庇付冑があります。前者は松本市桜ケ丘古墳、後者は飯田市妙前大塚古墳から出ています。とくに妙前大塚のものは、鉄板の上に金銅板が重ねてあり、装飾品としてもすぐれたかぶとです。

長野県下には約三五〇〇の古墳がありますが、今のところ破片も含めてよろいは三四領、かぶとは一四鉢しか発見されていません。とても貴重な品だったことがわかります。

◆つくった人と身に着けた人

日本で出土する五世紀はじめごろまでの鉄製よろいかぶとは、朝鮮半島でつくられたものがもちこまれた

長野県内の武具を出土したおもな古墳

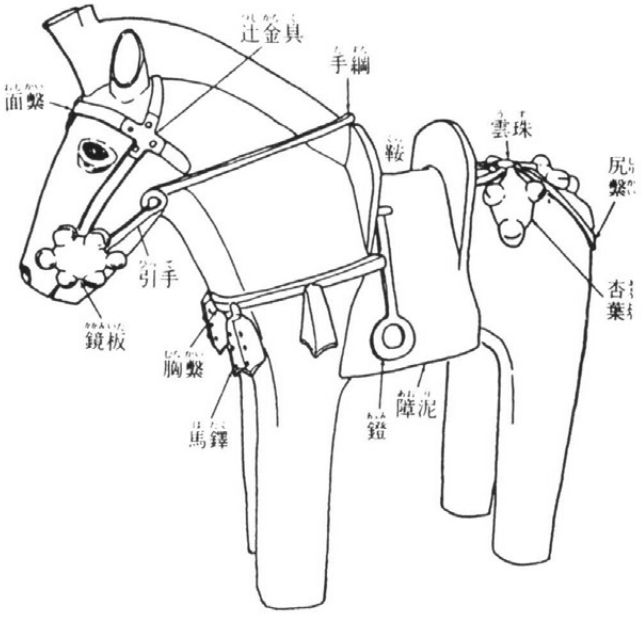


上：衝角付冑　高さ18.4cm
下：短甲　高さ42.4cm　松本市桜ケ丘古墳（松本市立考古博物館蔵）

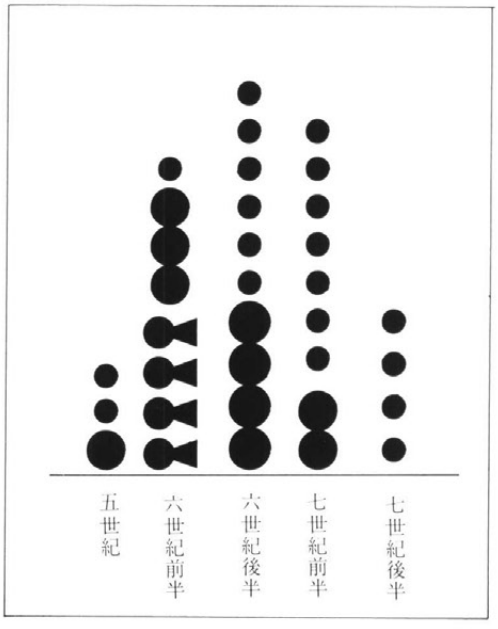
上：眉庇付冑　高さ30cm
飯田市妙前大塚古墳　複製
（原資料県宝　飯田市開善寺蔵）
下：短甲　高さ44cm
飯田市鎧塚古墳　複製
（原資料　飯田市教育委員会蔵）

よろいかぶとを身に着けた埴輪
群馬県太田市　高さ130.5cm
（東京国立博物館蔵）

0　10　20　30m



馬具の着装場所と名まえ
（岡安光彦「馬具ー副葬古墳分布からみる」1995年）



馬具出土古墳とその大きさ

前方後円墳
直径20m以上の円墳
直径20m未満の円墳

と考えられます。ところが、五世紀後半には、大和政権の有力者たちのもとで武具づくりの技術集団が組織され、つくり方や形が統一されてきます。

大阪府藤井寺市の野中古墳には、一一領もよろいが副葬されていました。中央の有力者は、完成した武具を集中的に管理し、配下の者や地方の大豪族たちにあたえて、政権を支えるために利用していきました。かれらは、実戦のためというよりも権威の象徴として、よろいやかぶとを手に入れ、身に着けたようです。

◆大和政権の騎馬軍団へ

同じころ朝鮮半島から馬とともに乗馬と馬産の技術が伝えられました。長野県でも二四〇あまりの古墳から馬具が出土しています。松本市南方古墳には、馬の動きを制御するためのくつわや、騎手のからだを安定させるあぶみ、馬の体を飾る金具などが副葬されていました。

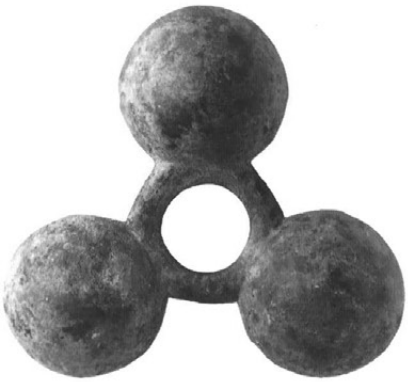
長野県の場合、六世紀ごろまでは直径二〇㍍以上の大型古墳にほうむられる有力者に馬具が副葬されることが多かったのです。ところが、七世紀以降になると、中・小型の古墳にも副葬されるようになりました。

かれらは連合して、強力な騎馬軍団として大和政権の軍事力の一翼をになっていたのです。

古墳から出土したさまざまな馬具

馬鐸（ばたく）　高さ16.6cm　飯田市鎧塚古墳
（飯田市教育委員会蔵）

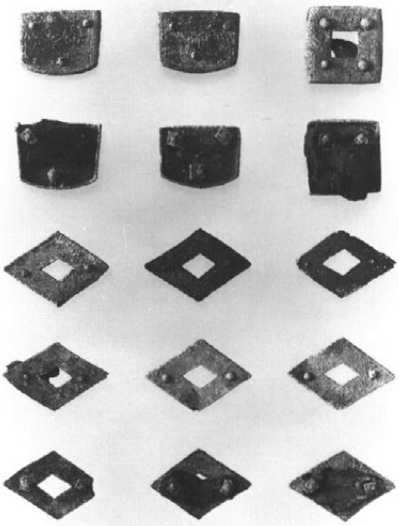
轡（くつわ）　佐久市東一本柳古墳
（佐久市教育委員会蔵　馬事文化財団提供）



三環鈴（さんかんれい）　縦15.4cm
飯田市金山二子塚古墳（飯田市教育委員会蔵）

杏葉（ぎょうよう）　長さ10.6cm　佐久市東一本柳古墳（同上）

鎧（あぶみ）　高さ26.4cm　松本市南方古墳
（松本市立考古博物館蔵）



さまざまな飾り金具　右下3.4cm
佐久市東一本柳古墳（同上）

濠（ほり）に囲まれた篠ノ井の弥生ムラ

◆ムラを巡る濠

一九八九年、長野市篠ノ井塩崎の千曲川左岸で弥生時代後期後半のムラが発掘調査されました。竪穴（たてあな）住居跡が集中して発見された場所のはずれに濠がありました。以後、数年にわたる周辺の調査によって発見された濠を結んでみると、立ち並ぶ竪穴住居を取り囲む楕円形の環濠（かんごう）が復原できました。

濠は、深さ二・二㍍、幅三・六㍍ありました。濠を横に切った形は台形で、底にはさらに垂直の細い溝が掘られています。濠に崩れ落ちた土を観察したところ、濠の内側には掘り上げた土で築いた土手があったようです。

◆住まいと墓

ムラは、千曲川が運んだ土砂によってできた堤防（自然堤防）の上にあります。環濠に囲まれた場所の広さは、およそ二万六三〇〇平方㍍です。これは長野市にあるビックハットの二倍強にあたります。

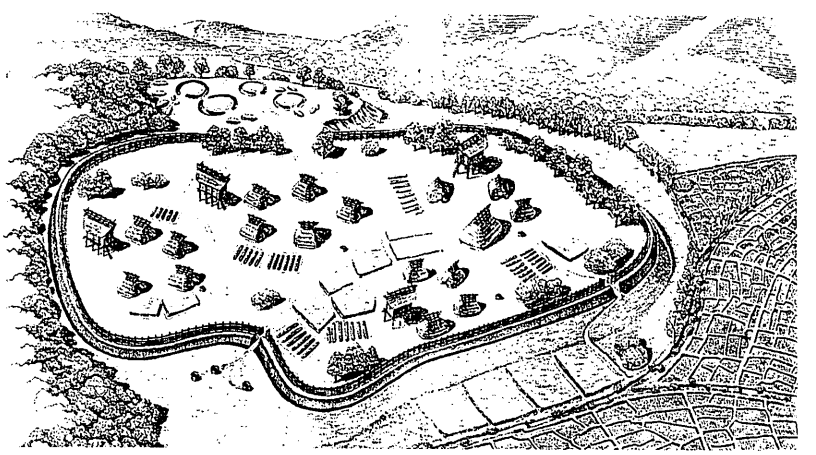
ムラのなかには、竪穴住居はもちろん、井戸や貯蔵用の穴などがあります。竪穴住居は方形で、大きさは一辺一〇㍍から四～五㍍程度までさまざまです。これらの施設のあいだには、ところどころに畑が設けられていたと思われます。

墓は環濠の外につくられていました。遺体は、ふつう長方形の穴にしつらえた木のひつぎにほうむられます。ところが、なかには一辺一一・七㍍をこえる四角い区画溝と盛り土をもつ墓（方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ））もあり、ムラの中に有力な人がいたことを物語っています。

◆赤い土器と銅鏃

竪穴住居や井戸、濠からは、たくさんの弥生土器が出土しています。このなかには種もみの生まれ変わりを願って赤く塗られた土器もあります。また、土器と混じって装飾品のガラス小玉も発見されています。

大切にしている種もみなどは、外敵から守らなくてはなりません。篠ノ井遺跡では、大型の竪穴住居跡から青銅製の矢じり（銅鏃（どうぞく））が出土しています。弥生時代になると、石製の矢じりから、やがてより殺傷能力の高い金属製の矢じりが使われるようになります。なかでも銅鏃は、後期になって実用的な武器として利用されますが、こうした波は確実に篠ノ井遺跡にもおよんでいたのです。



弥生時代のムラ　復原画（ムラヤマ提供）